
奇跡の法則

めろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奇跡の法則

【Nコード】

N9960X

【作者名】

めろん

【あらすじ】

はじめまして、じゃない方もいるかもしれません。

この小説は魔法少女リリカルなのはの世界観にオリジナル要素をかなり入れた作品です。

実は昔あるサイトで公開していたものなので、見覚えのある方ももしかしたらいらっしゃるかもしれません。

最近忙しさがましになってきたので、続きを書いていこうと決断し

ました。

よろしくお願いします。

時系列は闇の書事件から六年後。

A・s・S・t・r・i・k・e・r・sの間のお話です。

2011-10-28

プロローグ

奇跡。

そんな言葉が、この世界には存在する。

人はそれを「希望」の象徴だと信じ、自ら求める者が多い。

奇跡的な回復。

奇跡的な勝利。

奇跡的な解決。

奇跡的な進化。

奇才。奇特。奇知。奇骨。

そんな足跡が奇跡である、と。

――が。

しかし。

奇跡という言葉には、決して希望ばかりが含まれている訳ではない。

表があれば、裏がある。

表があるから裏がある、と言い換えてもいい。

少なからず、負の要素を孕んでいる。

負の要素が潜んでいる。

奇跡的な衰弱。

奇跡的な敗北。

奇跡的な破綻。

奇跡的な、死。

奇怪。奇異。奇禍。奇妙。
そんな足跡も奇跡であらう。

と前置きをしたところで、これから語るのはそんな奇跡のお話。

希望の奇跡なのか。
絶望の奇跡なのか。

決めるのはあなた次第だ。

ただ一つ言えるのは。

奇跡なんてものは唐突に、何の前触れもなく訪れるということだ。

——さて。

それでは始めようか。

いくつもの出会いが奇跡を紡ぎ、ある軌跡へと収束する。

そんなありふれた、日常の物語。

あの日あの時

6月3日。

じめじめと不愉快さが増す季節だが、それでも世間の学校はお構いなしに登校日である平日。

梅雨に入りかけの時期でもあり、只でさえ気だるい朝をいつそうと辛いものにする。

「雨、降るかな？」

通学路。

ぼつりと呟く少年もまた、例に漏れず学校の制服を着用していた。

私立桜波中学校——地元ではわりと有名な進学校である。

少年の名は、神崎 （しんざき） 木葉。

真っ直ぐに伸びた綺麗な黒髪と端正な顔立ちには到底似合わない、ふてくされたような表情を崩さずに歩を進める。

「天気予報見なかったの木葉？午後から90%だって言ってたよ」

その隣を歩くのは、木葉よりも頭一つ分背の低い少年。

木葉自身そんなに長身ではないため——むしろ一般平均よりも低い——その少年の背の低さがうかがえるだろう。

「いや、さっき起きたとこだからさ」

「……相変わらずだなあ。だいたい予想してたからさ、傘二本持ってきてるよ」

「ああ。悪いな、ひで」

南坂 秀。

木葉と同じ、三年生を示す赤色のネクタイをしていなければ、小学生と言っても通じそうな体躯だ。

彼は幼なじみの平然とした態度を見て、軽くため息をついた。

「本当に悪いと思ってる？」

「思ってるさ」

「それじゃ、いきなりクイズ。木葉の家に僕の傘が何本あるでしょうか？」

「……8本くらい？」

「……………」

「ごめん。実は何とも思っていないんだ」

「だろうね。知ってる」

ちなみに9本ね、ともう一度、今度は深くため息。

それからは特に会話もなく、いつもの通学路をゆつくりと歩いた。時間にして約5分。

桜波中学校の目印である桜並木が目の前に広がってくる。

「んっ？」

「どうした？」

と、突然首をかしげる秀の視線は校門とは逆の方向へ向けられている。

「うん、今日は1人足りないなーってね」

その先には、4人の少女たち。

「ほら、サイドポニーの子」

「……ああ、ほんとだ」

いつもは5人で登校する彼女たちは、桜波中学校の間でも大きな話題の1つになっている。

なんと言っても、個々人の容姿レベルが格段に高いのが原因だ。

私立聖祥大付属中学の制服に身を包んだ彼女たちは、桜波の中では『聖祥レンジャー』とか、なんとも言えない——率直に言えば痛い——俗称があつたりする。

毎朝、桜波中学前の桜並木で待ち合わせをするらしく、その時間に合わせて登校する連中もいるほどの人気ぶりだ。

「5人中全員が可愛いってのはあれだよな、『毒をもって毒を制す』ってやつ」

「いや、『類は友を呼ぶ』でしょ」

「同じだろ」

「ニュアンスがかなり違うんだよ」

と2人が軽口をかわしていると、4人はすでに反対方向へと歩いてしまっていた。

「結局5人目はこなかったね。……『聖祥ピンク』だっけ？」

「みたいだな。俺には何の関係もないけど」

関係したくても無理だ、と興味無さげに校門をくぐる木葉と、それを急いで追いかける秀。

しかし。

木葉のつぶやきは、本人の知らないところでひっくり返されることになる。

それとは歩みを逆にする4人の少女たち。

「あの人でしょ？あんなたちが言ってたのって」

歩き始めてすぐに、1人の少女が話題を持ちかけた。
日を受けて輝く金の髪。

すこし翠の入った瞳からは、勝気な性格がうかがえる。

「そうやよ。神崎木葉って言うてたかな」

それに答える茶髪の少女は、今来た道を軽く振り返りながら言う。すっかり緑に染まってしまった桜の木々のなか、ちょうど話題にあった少年が校門をくぐったところだった。

「なんやアリサちゃん、興味あるん？」

ニヤリ。と獲物を見つけたかのように口を吊り上げ、アリサと呼ばれた少女へ視線を戻す。

「なっ、ち、違うわよ！昨日からフェイトが何度も嬉しそうに言うてたから気になっただけ！」

「ほう、そらフェイトちゃんに詳しくお話してもらわなー？」

「あ、アリサ！？違うんだよ？私はただ、同じ歳の仲間が増えるのが楽しみだけで……ね、はやて？」

「んー。なんや、つまらんなー」

桜波中学校とは逆方向の通学路。

3人の少女たちが歳相応の色恋話に会話を弾ませる中、1人だけはどこか複雑な表情を浮かべていた。

まるで何かを案じるような、慈悲深い瞳で。

「どうかした？すずか」

そんな態度にはじめに話をふった少女、アリサが気付き少し心配そ

うに尋ねる。

「うっん、ちょっとね。その男の子も大変だなーって」

ああ、確かにね。

と納得したアリサは反対側のフェイトに顔を向ける。

「えっと、フェイトのお兄さんが見つけたのよね？」

「そうだよ。クロノも同じようなこと言ってたなあ」

——追憶。

三日ほど前のこと。

クロノ、という青年が作成した報告書には、こんなことが記されていた。

第97管理外世界『地球』

闇の書発現のこの地において、魔力を持った少年を発見

その反応は緊急を要するほどではなく、警戒は不要かと思われる

しかし、場所が場所であり念のためにしばらくの監視を決定

1ヶ月の監視の後、何もなければ少年を管理局で保護

その際、改めて彼の処遇を決定する

「でも、なんで保護しなきゃいけないのかな？何もなかったらその

「ままでもいいんじゃない……？」

「すずかの表情は一行に晴れる気配がない。

フェイトもそれに同調するかのように、声のトーンが少し下がった。

「本当は監視もいらなくらいなんだけどね。この海鳴市は『そういうこと』が起きやすい場所らしくて。だから変なことが起きちゃう前に、本人に理解しておいてもらったほうがいいだろう、ってクロノが」

「クロノくん、真面目さんやからなー」

暗くなってしまったその場の空気を変えようと、はやてはわざと明るい口調で話をつなぐ。

「すずかちゃんは、なにがそんなに心配なんや？」

「……だって、知ってるから。なのはちゃんがすごく大変だったこと」

今この場にはいない、もう1人の親友を思う。

それは、まだみんなが小学生のころの記憶。

「そ、そういえば、なのはは今日お仕事だった？」

そのことに際して少し恥ずかしい思い出をもつアリサは、何とか話題を変えようと慌て気味に尋ねる。

「うん、お昼には学校に来るって」

昔その話を聞いたことのあるフェイトは、アリサの意を察したのかクスクスと笑いながらそれに返す。

そんな対応に少々顔を赤らめたアリサは、そっか、とだけつぶやいて再び前を向いた。

本日の天気は曇りのち雨。

今も空は淀んだ色に包まれているが、この4人の間は暖かい雰囲気
で満たされていた。

平和な日常。

今思えば。

それは、嵐の前の静けさだったのかもしれない。

始まりをあげよう

「今日は言わないんだね、『面倒くさい』って」

昼休み。

午前の授業を消化し、午後の授業へと移行するまでの長いようで短い安息の時間。

木葉の席までやってきた秀がまず放った言葉がそれだった。

「お前さ、わざわざそれ言いに來たの？」

「そんなわけないでしょ。『ご飯食べよ？』」

新学年が始まって2ヶ月ほどが経つ教室内では、すでに各々の所定位置が決定していた。

木葉と秀。

この2人が一緒なのは1年生のときから変化なく、今日もまた例外ではなかった。

「でさ、何か理由でもあるの？いつでも暇を見つけては言ってる言葉なのに」

「そんな執念は持ったことねえよ」

口癖を言うタイミングを見計らうなんて。

それはすでに口癖ではないだろう。

弁当に箸をつけてすぐ、これもいつも通りの他愛ない会話。それは、2人の中ではすでに日常の1つになっている。

「何となくだけどな、今日は面倒くさそうなことばっかり起きるよ
うな気がしてさ。溜めてるんだよ」

「回数制限あったんだ……」

呪いみたいだね、と苦笑。

「ちなみに今日の『面倒くさ指数』は――」

「基準がよくわからないよ。80ポイントくらい？」

「3テラ」

「ハイスペック!？」

単位もケタも違った。

「な?溜めてないとやってけないだろ？」

それと時を同じくして、聖祥大付属中学。

屋上で昼の一時を過ごす4人は、ついさっき学校にやってきたもう
1人の親友を迎えていた。

「お疲れさま、なのは」

高町なのは。
聖祥ピンク。

彼女もまた、人気が出るのが十二分に納得できる容姿をしている。

「ありがとう、フェイトちゃん」

その顔つきに似つかわしい太陽のような笑顔も、彼女の魅力を上げるのに手伝っているようだ。

「それで、今日は何のお仕事やったん？」

「んとね。アースラ組の代表として、クロノくんと一緒に本局に呼び出されたんだけど」

なのはの母親がフェイトに預けていた弁当を受け取り、はやてが横に詰めてくれたおかげでできたスペースに腰を降ろす。

いつ雨が降ってもおかしくないような天気の中、それでも屋上で昼食をとるのは、彼女たちに何らかのポリシーがあるのだろうか。

「ちょっと、変なんだよね」

「変って、どんな風にや？」

えつとね、と左手を軽くあごに添え、悩ましげな表情を浮かべるのは。

それは、今朝のすずかが見せたそれによく似ていた。

「アリサちゃんとすずかちゃんは、『神崎木葉』くんのこと……」

「ああ、それなら今朝詳しく聞いたところよ」

「うん。その男の子も大変だった話だね」

それなら話が早いね、と一息。

「クロノくんが報告書を提出したら、本局から緊急指令が出たの。内容は、『神崎木葉の即時保護』」

「えっ!？」

突然のことだ。

その話からだけでは、疑問しか生まれない。
なぜ、の一点張りしか。

「クロノは、1ヶ月くらいは様子見だつて……」

「その予定だったんだけど、私も詳しいことは何も——っ」

刹那。

目の前からアリサとすずかが消えた。

「なっ、——っ!？」

否。

消えたのではなく、逆だ。

なのは、フェイト、はやて。

魔術師である3人だけが、世界から切り離されたのだ。

「これは――結界っ!？」

――そして。

ここにも1人、世界から分断された者がいた。

「ほらな……」

目の前で弁当を食べていたはずの秀が、教室中の全員が、消えた。少なくとも、彼の目にはそう映った。

「やっぱり、面倒くさくなった」

窓の外では、雨が降り始めていた。

蒼白い幻想的な空間に取り残された3人の眼前には、空中に展開された電子パネルが浮かんでいた。

「3人とも、聞いてくれ」

それに映るのは、彼女たちの恩人とも言える青年。どうやらテレビ電話のようなものらしい。

「クロノくん、この結界は？」

少しずつ降り出した雨が彼女たちの肌を濡らすが、そんなことは気にしていられない。

今現在の最優先事項は、状況の確認。
及び、打破である。

管理外世界での魔法——結界の使用は余程のことが無い限り許可がでない。

厳しい罰則が生じるのは周知のことだ。

「いや……だが、ある程度の予測はつく」

「神崎木葉くん、やね」

そついった状況下で何のためらいもなく魔法を使用するものは限られた者。

自己防衛、もしくは——犯罪目的。

「そうだ。本局からの緊急指令は、このことを案じてかもしれない。確証はないが、神崎木葉には『何か』あるとみていいだろう」

「じゃあこの結界は木葉くんが？」

単純に考えればそうなるだろう。
慣れない魔法の誤作動か何かか。

それが最も妥当な線だ。

——そう、思いたかった。

「いや。結界は何の知識もない者が扱えるようなものじゃない。それに、魔力の質が違いすぎる」

この結界が木葉のものじゃないならば。
考えられる可能性は、1つしかなくなってしまうから。

「……クロノ、彼は今どこに？」

「学校にいたが、自宅の方へ向かっているようだな。結界で情報がジャミングされてしまっているせいで、詳しくは掴めない。パツケージの自宅で待ち伏せてくれ」

待ち伏せ、とどこかこちらの方が犯罪の匂いがする単語に、フェイトは苦笑する。

「それじゃあ、いこうか」

いろんなことがあった。
だけど、乗り越えてきた。
この3人で。
今回も、きっと。

そんな確信があるからこそ、2人は笑顔でうなづく。

「いくよ、レイジングハート」

そして、呼ぶ。

「いけるね、バルディッシュ」

自分の、相棒の名を。

「いくで、リインフォース」

家族の名を。

『セット・アップ!』

3人は、空を駆ける。

「面倒くさい」

平日の真つ昼間。

いつもはちらほらと見える人影が1つもないのは、異常といえた。

「ああ、1回使っちゃったよ」

まだ溜めとかなないと、と軽く言うが内心にはかなりの焦りがあった。

「……黒魔術、呪い、夢、幻術？現実的じゃないな」

あながち間違ってはいない予想で、思考は自己完結。

とりあえず家に帰って寝さえすれば元に戻っているだろう、という楽観的な考えだが、そこには悪夢しかないことを、木葉は知らない。

対して、魔術師の3人はすでに神崎家に到着していた。
そのまま指示通り木葉を待ち伏せしようと思っていたが、

「……今、中から音しなかった？」

「うん。何か物音がするね」

ほんの微かにだが、人の気配を感じる家の中。
それに耳を澄ませていると突如、ひと際大きな音がした。

——何かが倒れるような、嫌な音。

「帰ってきてるんやろか？」

だとしたらすごい順応性だね、となのは。

「それじゃあ、入ってみ——」その必要は、ありませんよ」

フェイトが一步足を進めた瞬間、その声は1人の少女によってかき消された。

とても澄んだ、透き通るような声。

「あ……………」

もし神崎木葉が今回の事件に関与しているのなら、ここにいるのは

彼女たち以外に二組しかない。

木葉と、結界の首謀者。

目の前にいるのは、明らかに後者だ。

その彼女が、目的の家から普通に出てきたのだ。
ふらっと、買い物に行くかのように。

「えっ……」

だがしかし、驚愕すべきはそこではない。

彼女の美しく魅惑的な純白『だったであろう』ドレスが、何かで赤
黒く染め上げられていたのだった。

君の罪は

[illegible]

少女のドレスを染め上げているのは、まさしくそれだった。足元から首の上まで、いくらかは顔にまで付着している。それだけの血を流せば、その持ち主だった者はすでに――

「そ、その血……まさかっ——」

いくら多くの死線をくぐり抜けてきた彼女たちとて、さすがに冷静を保てる状況ではなかった。

「神崎、木葉くん、の」

実際、ひどく声が震えているのが自分でも分かる。

ついさっきまで生きていた彼が。
 なんの罪もない彼が。
 仲間になるはずだった彼が。

「神崎、木葉……？」

しかし、少女は平然と、そして悠然とした態度で言葉を紡ぐ。

「ああ、Aさんのことですか」

「A……さん？」

はい、と頬の血を右手で拭う。

そんな仕草1つにも、どこか気品があるように見えてしまう。

「あなた方のことも、情報として受け取っています。Bさん、Cさん、それからDさん」

なのは、フェイト、はやての順に血を拭った手で指を指しながら言い放つ。

その指から血が滴り落ちる。

ぽつり、と地面に。

何の情緒もなく幾多のシミを作り上げていく。

「初にお目にかかります。私は………そうでした。まだ今回の名前をもらっていませんでしたっけ」

そのまま手に付いた血をペロリと舌ですくい取り、3人の前に出現した電子パネルに目を向ける。

「これはどうも。Eさん」

「Eさんなんて呼ばれる筋合いはないが。まずは話を聞かせてもらう」

そこにはクロノ、そして情報管理及び参謀のエイミイも映し出されている。

「いえ、あなたはGさんです」

「じ、ぢい！？Fでさえないのか！？」

「クロノくん！？今はそれどころじゃないんでしょ！」

予想外の認識に動揺するクロノを、エイミイ——Eさん——が慌てて叱咤する。

せっかくのシリアスな雰囲気ぶち壊した。

「つと、すまない。おほんつ、取り乱した」

だがそこは、さすが執務官といったところか。
すぐに真剣な表情で話を戻す。

「この結界は君のものだな。いったい何の目的——「おいおい」
だがそれも、もう1人の来訪者によって中断することになった。
その場の全員が動きを止める。

「いったいどういう状況だよ、これは」

神崎木葉、その人である。

特に焦った様子もなく、ごく自然にそこに存在していた。

「あ……え、なんで生きて？」

「いや、初対面から失礼すぎるだろ」

面倒くさ、と溜めていた1回分を無意識に使用し、何故かここにいる『聖祥レンジャー』を見つめる。

「とりあえず聞くぞ。今この状況は何だ？何で人が消えた？この変な空間を作ったのはおまえらか？そもそも――」

「え、えつと……そんな1度に言われても」

木葉の矢継ぎ早な質問にうまく対応しきれないのは。

フェイトやはやて、そしてクロノも展開の早さに思考が追い付いていない。

「来ましたか、Aさん」

そんな中、赤い少女だけは違った。

瞳はしっかりと木葉を捉え、離さない。

対して木葉は、それにただ訝しげに視線を合わせる。

「やっと、役者がそろいました。それでは言伝をお伝えします。きつと、Gさんの質問の答えにもなるはずです」

そのまま目を閉じ、台詞を思い出すように話します。

他の者はそれを、何をするでもなく見つめていた。

『【運命の歪曲者】^{フレイク} 高町なのは

【造られた禁忌】^{クローン} フェイト・T・ハラオウン

【闇が溶けし力】（デッドライン） 八神はやて

そして、

【決定事項】（オールレディ） 神崎木葉

私たちは【管理局の管理者】と申します

率直に申し上げますと

あなた方の存在はこの世界の維持に対する反逆です
存在が罪なのです

よって、あなた方には初めから『なかったこと』になっていただく
こととなりました

ご了承ください

目を、開ける。

「つまり要約するとですね……………」

すっぱり、きっぱり、まったり、くっきり、しっかり、はっきり、
きっちり、

死ねよ」

「——っ」

色々ぶつとんでやがる。
木葉はまずそう思った。

不思議な蒼白い空間。

『聖祥レンジャー』の妙な出で立ち。

空中に浮かぶパネル。

そして、赤い、紅い少女。

「それだけでも容量いっぱいなんだけどな」

加えて、少女は何と言った？

『【決定事項】（オールレディ）神崎木葉

死んでください』

「本当に、面倒くさい」

「……木葉くん？」

そして木葉を支配するのは、他の何でもなく。
怒りだ。

何をしたわけでもなく、おかしなことに巻き込まれた。
理不尽だ、と一言。

「この際、この状況に対する疑問はどうでもいい」

そして、

「そろそろ限界だ」

駆け出す。

疾走。

風を受けながら全力で踏み込む。

相手が子供だ、女だという認識はある。

だが、こんな状況を作り出したであろう者に対する配慮など、なかった。

軸の左足を踏み込んだ時には、もう少女の目の前に立っていた。

「まずは一発、ぶん殴ってや——」

が、その言葉が最後まで紡がれることはなかった。

気付けば進行方向とは真逆に、抵抗など皆無に吹き飛ばされていた。
腹部に痛みが走り、溜め込んでいた空気が吐き出される。

「あまり、私をなめないでください」

少女はその場から動いていなかった。
しかし、彼女の周囲には蒼い光が3つ、たゆたうように浮かんでいる。

その1つが、木葉の腹部へ投擲されたのだ。

「……なんだよ、それ」

肺の中の酸素を根こそぎ持っていかれた。
すぐに立ち上げられる状態ではない。

「先程は死ねと言いましたが、あれは間違いでした。訂正しましょう」

「私が、あなた方を殺します」

殺気——そんな言葉では言い表わせない。
毒気、といった表現が近いだろう。

目に見えない圧力に、なのはも、フェイトも、はやても動けずにいる。

辛うじて動くのは、口だけだ。

パネル越しのクロノは啞然の表情。

見た目10歳ほどの少女が、こんな気当てができるのか、と。

「なんで、こんなこと……」

「言いましたよね。あなたは反逆者です」

ゆつくりと、近づく。

「ならば、与えられる制裁は『死』なのですよ」

手を伸ばせば届く距離。

「世界にかわってお仕置きです」

そんな位置で少女は右手を天に掲げ、一気に振り下ろす——ことはできなかった。

瞬時に振り返り、自分に向かってきた何かをたたき落とす。

「おい。あんまり俺を、なめるなよ」

神崎木葉。

彼の周りには、少女と同じくいくつかの光が浮遊していた。先に少女に弾かれたのも、その中の1つ。

色は異なり、白銀。

「これ、俺以外にもできるやつがいたんだな。びつくりで固まっちゃったよ」

同時に、3人は少女からバックステップで距離をとる。

少女の注意が木葉に向かったからだろうか。

彼女たちの足は、すんなりと動いた。

同時に武器を構えるのも忘れない。

「びつくりしたんはこっちの方や。木葉くん、もう魔法使えたんやね」

「魔法？これが？」

「自覚はないんだ……」

はやての言葉に戸惑う木葉が少しおかしく、フェイトはこんな状況にも関わらず笑ってしまう。

「覚醒済み、ですか」

そんな中、少女は1度驚愕の表情を浮かべた後、何かを思案するように首を傾げる。

「『あの方』の話と少しずつれていますね……やはり、完成とは言いがたいですか」

何かが狂っている。

精巧に作られたはずの歯車が噛み合っていない。

そんな訝しげな表情。

それが何なのかは分からないが、今が好機だと木葉は悟った。

「たぶん、おまえらも同じようなことできるんだろ！？今のうちに、遠慮なくぶち込みまうぞ！」

白銀の光の数が増える。

その数5つ。

「クロノくん！」

「ああ。相手の戦闘意志は明白だな」

そして3人も、それぞれの光を生み出す。

なのはは桃色。

フェイトは金色。

はやては白色。

数は、実に木葉の3倍以上。

なのはにいたっては、数える事さえも億劫なほどだ。

「これより、戦闘による撃墜を開始してくれ」

残ったもの

——撃墜

急速で急激な展開に、頭が着いていかない。

ともかく。

体は動く。

戦闘、開始——

「中止ですね」

少女の周囲の空間を埋め尽くすように設置される様々な色の光を一瞥して、つぶやいたのはそんな言葉。

これには、その場の全員が動揺を禁じえなかった。

「聞こえませんでしたか？中止、と言ったのですよ」

動きが止まった木葉たちを見て、呆れたように肩をすくめる。
そして一番に動いたのは、やはり木葉。

「ふざけんな」

少女に向かって駆ける白銀。

それは問答無用に少女の意識を刈り取ろうと迫る。

「少々、うざいです」

しかし、白銀は当たるところか途中でその方向を変え、四方に霧散

してしまう。

「ここで消えてもらおうかとも思ったのですが、Aさんが魔法を使えるとなると話は別です。『あの方』に報告しなければいけませんので。」

……はあ、面倒くさい」

「——っ、俺の台詞を、パクんじゃねえ！」

怒り。

それはある意味、周りを見えなくさせる魔法。
新たな白銀を生成した木葉は再び少女へ投擲するが、結果は変わらず。
かすめることさえない。

「くそっ……おい！おまえらもやれ！」

最初とは違う木葉の激昂した声で、3人はようやく我に返る。

「う、うん！」

返事と同時、数十もの攻撃が少女を襲う。

壊れた花火のように光があふれ、目で追えないほどの速さで直進する。

が、それもまた届く前に方向を変えてしまった。

「うそっ！？」

「無駄ですよ。私の魔法は少々特殊でしてね。空間を『歪める』のですよ」

このように、と右手を木葉たちに向け、一気に閉じる。

刹那、目の前の景色が文字通り『歪んだ』。

バットを額に当てて、100回ほど回った後のような感覚。立っていることすらできず、座り込んでしまう。

「こんな、ことって……」

「認識を間違えないでください。私は『逃げる』ではなく、『今回は引く』と言ったのです」

雨がさらに激しくなる。

少女にべつとりと付いていた血はある程度流され、それさえもドレスの模様のように滲んでいた。

「待て、全然答えになっていない！」

急いで止めるのはクロノ。

「君の目的がなのはたちの抹殺だとしたなら、普通ここまでしておいてあっさり引きはしないだろう。君の本当の目的は、別にあるはずだ」

齒がゆい。

パネル越しにしか発言できない立場に、クロノは激しくそう思った。

「そうですね。あなた方の抹殺は、【管理局の管理者】の最終目的ですから。

今回の最優先は、他にありました」

少女の足元に、光が集まる。

光は円形の幾何学文様を型どり、そのまま体を包み込むように光が上昇。

「それは先程完遂しましたゆえ、今回は引かせていただくと言っているですよ」

ドレスの両端を軽く持ち上げ、一礼。

それだけで絵になるように美しく。

「また、お会いすることは【決定事項】です」

そして、そして、

「今日は、これにて」

後には、何も残らなかった。

意図がまったく読めない事件だった。

なのは、フェイト、はやて、そして木葉にこれといった外傷はなし。

さて。

神崎木葉の保護は、事件の後すぐに行われた。

そのまま魔法関連の話——木葉の素質の話を伝えると、ふーん。とただ一言だけが返ってきた。

これから魔法の力とどう向き合っていくかは、彼の判断に委ねるつもりだ。

最後に。

今回の事件の損失を報告しておこう。

死亡者、二名。

神崎葉巻。神崎落葉。

これにより神崎木葉は、15歳にして天涯孤独の身となったのだった。

事件からすでに1週間が経つ。

それは、木葉が答えを出すまでの期間。関わるか否か。

それはどう考えても、短すぎる猶予期間だった。

ただ。

今のところ、毎日は相変わらず日常だ。

「ねえ木葉、放課後カラオケいかない？最近暇でさー」

それを象徴するように、木葉に対する南坂秀の態度に変化はなかった。

だからこれは日常。平凡。素朴な日々。

そう思ったかったのだが――
しかし、大半は違う。

『強盗殺人事件』

木葉の両親の死が表向きにはそう公表されたのが原因だろう。
周囲から向けられるのは、好奇の視線だ。

「ひで、ちよつと来てくれ」

「あ……うん」

木葉は秀の提案に答えず、逃げるようにして教室を出た。
呼ばれた秀もただそれに従う。

着いた先は、屋上。

そこには2人以外誰もおらず、周りの目を気にする必要のない場所だ。

泣きたいくらいに辛いんだろうな、と秀は思った。

両親が殺された時の感情なんて味わったことないが、かろうじて理解はできる。

だからこそ、親友である自分にだけは弱さを見せてくれるのだろう、

と。

「あのさ」

しかし。

「少し、やりたいことができたんだ」

「……………は？」

そこで告げられたのは、驚愕の言葉だった。

何のこと？とか。

両親のことは？とか。

そんな単純な驚きではない。

『あの』神崎木葉が。

小銭を落としても面倒だ、と拾わない木葉が。

電気を消すのが面倒だ、と明るいまま寝てしまう木葉が！
トイレに行くのが面倒だ、とその場で用を足す木葉が！！

……………さすがに最後のは想像だが。

「えつとき、それ、何かの冗談？」

「……………いやまあ、そう言われても仕方ないよな」

久しぶりの晴天の空には似合わないため息。

秀は驚きを通り越し、逆に冷静さを取り戻した。

「それって、おじさんとおばさんに関係あるのかな？」

このときばかりは、秀が友であることを木葉は後悔した。
察しが、良すぎるのだ。

「そうなのかもしれない」

「そっか」

「何も聞かないのか？」

「説明するの、『面倒くさい』でしょ？」

「……………」

だが。

秀はやはり、親友だった。

誰よりも、何よりも、ただ向き合ってくれる。

「たぶん学校にはしばらく来れないから、ひでだけには言っとう
と思ってさ」

「うん。ありがとう」

「おまえはお礼言われる側だろ」

「違うよ。あの木葉が、支えにしてくれるんだもん。僕は嬉しいん

だよ」

「……ここだけ聞いたら、結構危ない会話だよな」

木葉は笑った。

親友とは笑顔で別れたいと思ったから。

不思議と、面倒くさいとは思わなかった。

「がんばってね、木葉」

「ん、ちょっといつてくる」

決心したのは、力を持つこと。

それは、復讐などではない。

そんなことは考えてもいないし、考えたくもない。

ただ。

自分の中で何かが動いた。

関わってみるべきだという、大きな確信。

理由なんてない。

そう、思っただけ。

生まれて初めてのこの感覚に従ってみよう。
何かあれば、それから考える。

今はただ。

この空を飛んでみたいと思った。

真っ白なページに

意外と、おもしろい。

最初はただ面倒くさいと思っていた『新人研修』もとい『魔導講義』とにかく勉強嫌い、というか机に向かうのが苦手な木葉は当初乗り気ではなかった。どうして講義なんかを、とふてくされていたわけだ。経緯として、以下に1週間前の会話を記そう。

「ねえ、木葉くん」

「ああ、何だ高町」

「なのは、でいいよ」

「いや、どっちでもいいじゃん」

「……そうだね、関係なかったね」

「で、何だ高町」

「……………」

「高町？」

「……………」

「……何だ、なのは」

「あのね、」

「関係大ありじゃねえか」

「何で魔法使えるようになったのかなー、て」

「ああ。えつとな、夜中に目覚めたときに、電気付けるの面倒くさいなーって思ってたらさ」

「……出たの？」

「出た」

「宝の持ち腐れだよ」

「何となくだけど、自覚はしてた」

「えつと、それでね。今日から1週間魔法使用は禁止ね」

「あん？」

「私たちがちゃんと魔法について教えるから、それまでは禁止」

「お勉強ってことか？」

「うん。がんばろうね」

「……………」

「がんばろうね？」

「……うん」

なんてまあ、女の子と下の名前で呼び合う素敵イベントを消化しつつ、お勉強会が強行採択されたわけだが。

しかし、実際に講義を受けてみると思っていた以上に楽しい。

魔法の起源。

術式の相違。

戦術から時空管理局のことまで幅広く。

「といった感じで、今日でお勉強は終了です」

「はいはい。ありがとうございます、フェイト先生」

ともあれ。

実戦までの準備段階はこれにて閉幕。

あの少女の素性が詳しく判明するまでは研鑽を積んでおけ、というのがクロノ艦長からの通達だった。

「まあ基本的な戦い方は記憶してくれたし、後は実践で鍛えていこうね」

「そうなるな。そういや、なのはとはやては？今日は珍しくないなかったけど」

講義程度ならわざわざ艦船アースラを使う必要はないとのこと、この1週間木葉はひたすらハラオウン家に足を運んでいた。塾のようなものだ。

「もう、忘れたの？木葉のデバイス調整だって昨日言ってたでしょ？」

——そう、デバイス。

魔法を使うにあたっての演算能力補助装置。

軽く魔法を使用するくらいならデバイスが無くともなんとかなるが、やはり戦いともなると高度で複雑な演算が必要不可欠になってくる。すべて、講義で教わったところだ。

「デバイスか。案外時間かかるんだな」

「それでも急ピッチなんだよ？それなのに木葉がただこねるから……」

当初、木葉には単に魔法を詰め込んでおく記憶媒体である『ストレージデバイス』が配給される予定だったのだが、なのはたちのデバイスを見た木葉が猛反発。

AIを含む『インテリジェントデバイス』を所望したため、否応なく時間がかかってしまった。

ちなみに『インテリジェントデバイス』はそう簡単に造れるものではない。

本来なら木葉の要求など瞬時に却下されるのだが、それでもクロノがしぶしぶ受け入れたのには、両親を亡くした、という木葉に対する

る同情が少なからず起因している。

「ちなみに、なんで『インテリジェントデバイス』が欲しかったの？」

「主には俺の代理人と、後は目覚ましとかに」

「最低だ」

艦船アースラ。

現在では時空管理局の地球支部のごとくなっている船の中に、木葉たちはいた。

「それでは。デバイスを与える前に、現段階までで分かったことを説明しておこう」

そう切り出したクロノの前には、例の少女の映像が映されている。

黒髪に、蒼い瞳。そして真っ赤に染まった純白のドレス。

あの時はそんな事を考えている余裕などなかったが、とても綺麗な顔立ちをしている。

「正直、【管理局の管理者】についての情報は一切ない。過去の事例も皆無だ」

ある程度承知していたが、見えない敵ほど怖いものはない。

最強と対峙するよりも。
不確定と対峙するほうがよっぽど。

木葉は軽く舌打ちした。

「あのよ、時空管理局ってのは言ってみれば世界を支配してる訳だよな？その管理者ってのは一体——」

「さあな。今のところ、ただの自称——「はったり」という線が有力だが」

苦々しい表情のまま肩を落とす。

一瞬の静寂の後、はやてがおずおずと手を挙げた。

「それやったら私たちを殺す、言っくんはどうなん？『世界の維持』とか言ってたな。それは名前に合った言い草やったけど」

「すまないが、それについてもまったくだ」

3人の少女の雰囲気は重い。

それぞれ言われた事に対する思いがあるのだろう。

【運命の歪曲者】ブレイク

【造られた禁忌】クローン

【闇が溶けし力】デッドライン

どれも過去と因縁深いものばかりだ。

「だとしたら、『分かったこと』ってのは？」

そして【決定事項】オールレディ、神崎木葉。

彼にはそんな事を言われても思い当たる節がないのか、飄々として
いる。

しかし。

「神崎葉巻、神崎落葉」

死を迎えた彼ら。

クロノから放たれた言葉には、軽い気持ちでなどいらなかった。

「検死の結果、君の『両親』は魔力を持っていなかった。
つまり、あの少女が言ったとおり『意図的に』結界内にとり残され、
殺害されたということだ」

それは、かすかな希望だった。

もし『たまたま』結界内にとり残され、『たまたま』殺されたのだ
としたなら、木葉にも諦めがついた。

運が、悪かったただけなのだから。

「それってよ……」

もし。

殺される確固たる理由があるとしたならば。

「俺のせい、ってことか？」

神崎木葉という存在が、悪かったということなのだろう。

「……上層部の君への対応は異質だった。さらに、今回の件で確信したよ。」

君には、『何か』がある」

異質。異端。異能。異常。

両親を殺され得るだけの何かが。

「——っ」

不意に、耐えられなくなった。

なるべく、できるだけ表には出さないようにしてきた感情が、押さえ切れずに溢れた。

そしてただ、走った。

目的地などなく、どこか1人になれる場所を求めて。

「クロノくん！そんな言い方って——」

「僕だって好きで言ったんじゃない！事実なんだ！」

知っている。

その辛さを。

「……事実は、受け入れなければならない時が来てしまう。それは、早いうちに済ませておいたほうがいいんだよ」

なのは何も言えなかった。

目の前の青年も、理不尽な理由で父親を失った1人だから。だからこそ、その辛さが分かってしまう。」

「私、木葉くんのところに」

「よせ、なのは。君が行っても慰めにはならない」

「……なんで？」

「今回の結界は『魔法関係者とその肉親』にまで対象範囲が広げられていたんだ。実際、君の家族も結界内にいた」

「うん」

「よく考えてくれ。今回、運が悪ければ君の家族までもが死んでいたかもしれないんだぞ」

「——っ!？」

「嫌な言い方だが、そんな賭けに『勝った』なのはが行っても……」

「で、でも……」

見ていられなかった。

もしくは、見ていたくなかったのだ。

1人の辛さは、なのはにも少しは理解できるから。

「なのは」

だがそこでなのはを止めたのは、意外にもフェイト。

「私に行かせてほしい」

「フェイトちゃん？」

彼女は、とても強い目をしていた。

「私にも、ちよつとは分かるから。木葉の気持ち」

「あ……」

かく言う彼女もまた、数年前に最愛の母親を亡くして、ずっと背負い込んできた1人だった。

「だから、行くね？」

「……うん。お願い、フェイトちゃん」

そんな彼女を、なのはとはやては心から信頼している。もちろん、兄であるクロノも。

だから、黙って彼女の背中を見送った。

対極の主従

走って、走って。

当てのないままに行き着いたのは、空が見える場所。

とは言っても艦船アースラは宇宙空間に存在するため、馴れ親しんだ空は真下にあるわけだが。

「ああ。何やってんだろうな」

暗闇の中に光るいくつかの星々。

これもまた、空だと言えるのだろうか。

「……木葉」

そんな感傷的な背中に、小さな声がかけられた。

柔らかくて、暖かな。声。

「フェイト、か」

涙を流している訳ではなかった。

しかし。

必至で感情を抑えようとしている木葉はそれ以上に痛々しく見えた。

「ちょっと意外だな。なのはあたりが来るもんだと思ってた」

不敵に笑って。敢えておどけてみせる。

だがそれも、フェイトを心配させる要因の1つにしかならなかった。

「辛いときは、泣いてもいいんだと思うよ?」

「……………」

「なんてね。本当は、私も辛い我慢してるんだ」

お互い様ってこと、とフェイトも木葉に合わせるように微笑む。
そのまま木葉の隣に並び、暗い空を見つめる。

表面上だけでも笑っていたい。

それがただの、強がりだとしても。

「…………【造られた禁忌】ってやつ。聞いても、いいか?」

「うん。いいよ」

木葉の率直な質問に、思わず本物の笑みがこぼれる。

普通なら聞いてはいけないようなことなのだろう。それくらいは木葉にも分かる。

しかし、今の2人にそんな上辺の遠慮は必要ない。

お互いに分かっちゃったから。

同じように悲しみ、苦しみを背負っていることを。

「私ね、生まれ方が普通とは違うんだ。木葉はクローン技術って知ってる?」

「ああ。…………遺伝子技術だよな」

「母さんがその技術を完成させて、私を産んでくれた」

どこか遠くを見つめるような目。

悲しんでいるのか、それとも懐かしんでいるのか。

「理由が、あつたんだろ？」

「そうだね。私は、死んじゃった娘の代わりだったんだ。なんだ、けど……」

「その子の代わりにはなれなかった、か」

「そうみたい」

しかしその目は、愛に溢れていた。
強い、想いで。

「だけどね、母さんにはすごく感謝してるんだよ」

返ってはこない過去。

それでも、涙は流さない。

自分だけ泣いてしまうのは卑怯だ。

「勝手に産み落とされて、勝手に嫌われてもか？」

「うん。それでも私は、私でいられるから。」

なのはに助けてもらって、はやてに出会って、リンディ母さんとク
ロノに家族になってもらって。

たぶん、今が幸せなんだよ」

綺麗だ、と思った。

同じ年齢だとは思えないような妖艶な雰囲気と、大きく澄んだ目をする少女に、木葉は息を呑んだ。

「だから木葉とも、もっと仲良くなれたらいいな」

「あ……ああ？、えっと、その……」

それは、願ってもない提案だ。

嫌な感じは、微塵もしない。面倒くさいとも思わない。

「うん。俺もだ」

だから、はつきりと。

共有したい、と思った。

苦悩も苦痛も、歓喜も悦楽も。

フエイトだけではない。

なのは、はやて、クロノとも。

こんな感情はなつかしい。

秀以来か。

「それならさ、より仲良くなるための第一歩としてな」

「うん？」

彼女たちになら、見せてもいいかもしれない。

隠してきた、弱い自分を。

「とりあえず、一緒に泣いとくか？」

こうして。

木葉とフェイト。

2人は少しだけ、近くなった。

暗幕。明転。

再び、アースラの一室に木葉たちが集まる。

「もう平気なのか？……というかフェイト、なぜ顔が赤い？」

「え！？あ、いや……赤くなんか、ないよ？」

木葉と抱き合って泣いてたからです、なんて実の兄——ではないが、義理の兄にも言える訳がない。

「ま、まさか……木葉、貴様が！」

だがフェイトの反応は、逆にクロノに勘違いをもたらすだけだった。

その勘違いはなのはとやてにも派生し、こちらも負けじと顔を火照らす。

「ふ、フェイトちゃん！私、そこまでお願いしたわけじゃ……」

「うわー、フェイトちゃんに先越されてもうたか」

やはりここは普通の子供中学生の反応。

つい先程までどんよりとしていた雰囲気が一気にピンク、と言うか混沌と化した。

「違うよ！ね、木葉。なんとか言っ……」

「早くデバイスください、お義兄さん」

「みみみ、認めないぞー！」

シリアスも何もあつたものではない。

そんな状態の收拾に数十分を費やし、フェイトの必至な説得でなんとか誤解は解けた。

——かに見えた。

「はあ、はあ……まあいい。いや、よくはないが、今はいい」

が、結局は問題を先延ばしにしただけのようだった。

「気を取り直して、デバイスを与えるわけだが。木葉、君はこの力を何に使う？」

話を戻して。

これこそが、最大の懸念。

あんな話を聞かされた人間のとる行動など、

「復讐を考えるか？」

おおよそ検討がつくからだ。

「はっ——」

だが。

耳にしたのは、嘲笑。

「クロノ、おまえは俺のことを分かってないな——まるで、分かってない」

出会ってもう1週間だ。

それだけあってまだ、俺のことを理解できていない。

「俺は復讐だろうが何だろうが、こう言うんだよ。」

『面倒くさい』

自分でやりたくないと思ったことは絶対にしない。そして今までの俺の人生、やりたくない事ばかりだった。

だから、何かを『した』ことがほとんどないんだよ」

木葉はこれまで、あらゆる事象から逃げてきた人間だ。
向き合ったことなど、皆無に等しい。

「そんな俺が、自ら関わりにきたんだ。なのにわざわざ復讐？」

そんなもの。

「面倒くさいな」

だから、それはただの杞憂に終わった。
終わって、くれた。

「……いいだろう。この力を何に使うかは、君の判断に委ねることにする」

逃げしか選択肢に持っていなかった木葉が、何かを感じ、魔法の力を得ることを選択した。
初めて何かを『したい』と思った。

だから、クロノは手に収められた銀の指輪を木葉に渡すことに躊躇わない。

それがクロノの、彼なりの信用の証。

「これが、デバイス？」

《yes・my load・please call my name》

木葉が指輪を受け取ると、それが合図のようにデバイスが起動する。

「名前……クロノ、こいつの名前って？」

「ああ、それならなのはやてが決めてくれたよ」

そうか、と後ろを振り替えると、少女たちが笑顔で迎えてくれた。

生徒と先生の関係ではなく、同じ魔術師の仲間になった。
3人は、それが心から嬉しかった。

「さつき、木葉さんとフェイトちゃんが出てた時にな」

「うん。勝手に決めちゃったけど、大丈夫？」

「平気だ。俺じゃ、ろくな名前を付けられないし」

そんな気がするよ、とフェイト。

なのははそれを確認し、木葉の腕を取って部屋を出ていこうとする。

「いこう、木葉くん！さっそく実践練習だよ！」

「あちゃー、始まってもうた。なのはちゃんの教導中毒」

なのはの代わりに、といった感じで、はやては木葉に手を合わせて謝る。

「いいさ別に。すぐに試してみたかったところだ」

「木葉、魔法のことだけにはやる気あるよね」

だけを強調するな、とフェイトを軽く小突きながら、なのはに引きづられて訓練室へ向かう。

「で、こいつの名前は？」

優しい彼女たちのことだ。

きっと素晴らしい名前を付けてくれたのだろう。

木葉の期待が高まる。

「うん。S t r a i g h t n e s s、愛称はストラス」

「へえ、ストライトネス……なんかかつこいいな。どんな意味なんだ？」

「和訳するとね、『真面目くん』」

「ただの皮肉じゃねえかよ」

ひとまずの糸口

「うーん」

開始から80分。

疲労で倒れた木葉を足元に、なのはは思案していた。

「特に秀でたところは、ないんだよね」

長距離支援のなのは、はやて。
近距離のフェイト。

2つのパターンに分けての適性検査だったのだが、どちらも芳しい結果は得られなかった。

「長距離で支援できるほどの魔力、というか体力は無いみたいやし」

「かといって接近戦でも体がついてこれてないよね」

手厳しい。

息絶え絶えになりながら、木葉は自分の甘さを認識した。

木葉の魔力は推定Aランク。

いきなりこの数値を叩きだすのはそこそこ優秀らしいが、いかんせん、目の前の少女たちが例外すぎた。

何せ、始まりがAAA+とかなんとか。

ケタが違うところか、格が違う。

「おまえらさ……手加減って知ってる？」

「あはは、ごめんね。少し休憩にしようか。フェイトちゃん、はやてちゃん、ちよっと」

もはや立つ気力すらない木葉を置いて、なのはは2人を手招きする。会話が、木葉に聞こえない位置まで。

「2人はどう思う？」

「さっきなのはちゃんが言ったとおりや。特に抜きでてる要素はあらへん……けど」

「うん。『目』が良すぎるよね」

フェイトの言う『目』はもちろん視力のことではない。

選別眼。観察眼。

常人では到底見切れないようなスピードの攻撃を、木葉は魔力付加なしで避けていた。

「違うと思う」

しかし。

話をふった当の本人はその考えを否定する。

「あれは『目』で見てやってるんじゃないよ」

「どういうこと、なのは？」

「実際、木葉くんは『目』では追いきれてなかった」

人間の視界は360度ではない。

当然死角というものが存在する。

が、木葉はそれさえもかわしてみせた。

「そやったら、勘で避けたってことか？」

「でも、それっておかしいよね。木葉はほんのちょっと前まで普通の中学生だったんだし」

眠っていた戦いのセンスが目覚めた、なんて話は漫画などでよくあることだ。

そんなことが、木葉に起きている？

なんて。

実際にはあり得ない話だが。

「あのね。これは私の推測なんだけど」

より声を小さく。

「木葉くん、最初は全然避けきれてなかった。でも、回を重ねるごとにかわす確率が上がってきてるの」

回避訓練は、ほんの十数分程度。

「たぶん、木葉くんは私の攻撃パターンを読んできてる」

たったそれだけの時間で人間1人のパターンが読めるとしたら。

「……かなりの切れ者ってこと？」

「本人に自覚はないみたいだけどね」

感心したように息をつくフェイトとはやて。

木葉のそれを見取ったなのはも、まだ信じがたいようだ。

「なら、オールラウンダーの策士って方向もありやね」

「うん。それならあの体力不足も補えるかも」

「本当に体力ないよね、木葉」

「……うん」

閑話休題。

育てる方向性が決定し、意気揚々と木葉のもとへ。

「さっ、休憩は終わり。次はもう少し本気でいくよ？」

「あん？さっきの、本気じゃなかったのか？」

恐怖の声色。

だが、それには何故か期待の声も混ざっているようだった。

「全然だよ？訓練用はかなり出力抑えてるもん」

抑えている？
あの強さで？

「ってことは……」

そして、木葉はニヤリと不気味に笑う。

「よし、一度本気で俺に打つてくれ」

と言いながら示すのは自分の腹部。

「ええ！？よし、じゃないよ！木葉くんはまだ魔力付加とかできないんだから、気絶しちゃうよ！？」

「いいから！——確かめたいことがあるんだよ。おまえらにもプラスになるぞ、たぶん」

かなり震えた声で言われても、説得力はないが。

「……もう！知らないよ！？」

「ちょ、なのは！？本当にや——」

時すでに遅し。

フェイトの制止もむなしく、半ばやけくそに光が放たれていた。

「うがんっ——」

そして期待どおりに命中。

奇妙な声を残して木葉は吹き飛んだ。

「ああ……なるほど………」

最後に意味深な言葉を置いて、意識は暗転。

「その……ごめんなさい」

目覚めると、そこは病室——という名の拷問部屋だった。
睨みをきかせてくる3人が果てしなく恐ろしい。

「あのね、この世界には無茶って言葉があるんだよ。知ってる？」

撃った本人がそれを言いますか、と思ったがもちろん口には出さない。

願いでたのは、木葉なのだから。

——それ以前に、言ったら地獄を見そうだ。

「重々承知してます、はい」

だから、ここは下手に刺激しない。

木葉の人生の中で幾度となく使ってきた手段だ。

「……本当に分かってる？」

「それはもう、神と仏に誓って」

神仏習合である。

そんな様子から大分懲りたことを感じ取ったのか、3人の表情が少し和らいだ。

「もう……射撃系の本気だったからよかったものの、砲撃系なら気絶じゃ済まなかったよ」

「あれより上があんのかよ……」

もしニュアンスを取り違えて『それ』を撃たれていたら、と思うとぞつとしない。

木葉は訓練室で倒れた後、そのままアースラの病室へ移送された。その際なのはクロノにこっぴどくお叱りを受けたので、今もまだ少しご機嫌ななめだ。

「あ、そっぴや聞きたいことがあつたんだ」

「うん？」

そんなのはに代わって、フェイトが応じる。

「魔法の色のことなんだけどさ、フェイトは黄色、ってか金色っぽいだろ？」

「うん。そっだよ」

「あれって、人によって決まってるもんなのか？」

魔力光。

それは個々の区別認識にも使用されている。

「そうだね。本人の意志とは無関係に【決定事】……決まってる」とだよ

「いちいち気にすんなよ。今更だろ」

「うん。ごめんね」

それは、2人が近づいた際に決めたこと。
互いに遠慮なく踏み込んでいこう、と。

「でも、それがどういう概念で、とかは分からないんだ」

なのはは桃色。

フェイトは黄色。

はやては白色。

そして、あの少女は蒼白い幻想的な色。

だからこそ、結界を構築した者とあの少女が同一人物だと断定できた。

「木葉は白銀、だよね」

「……ああ。へえ、そっか」

「それがどうかしたの？」

「いや、特には」

軽く思案する木葉が、どうも腑に落ちないフエイト。

そんな彼女を尻目に、木葉は勢いよくベッドから飛び降りる。

「よし。体に異常もないし、もうちょっと付き合ってくれるか？」

「ほんまに平気なんやろおな？」

「平気平気。なっ、ストラス？」

《all right・let's go》

そもそも、ストライトネスはまだセット・アップさえしていない。

1日体を実践に馴らしてから、だそうだ。

「あ、木葉くん！わざわざ気絶までした意味、ちゃんと教えてくれないきゃ！」

「そうだよ、木葉。私たちにもプラスになるってどういうこと？」

「ああ、それも平気。ちゃんと分かったから」

不敵な笑み。

それは、確信を持った者が見せる表情だった。

「例の少女の、強さの『ひ・み・つ』ってやつ」

「え!？」

例の少女、とはあの1週間前の人物だろう。
木葉の両親を殺した、あの少女。

「まずだな――」

だが。

それは急に鳴り響いたアラートの合図にかき消された。
目の前に、クロノを映したパネルが展開。

「1週間前と同じ反応が現れた。出られるか？」

「グッド、タイミングだ」

チェーンで首から下げていたストライトネスを外す。

初戦が実践になってしまったが、なんとかなるだろう。
そんな甘い考えができるのは、少女の強さの秘密を知ったから。

「行こうぜ。実際に見せてやるよ」

再会のち、さよなら

白のアンダーシャツに、黒のロングスラックス。
そして全身を覆うのは、ローブのような黒マント。

西洋の貴族を想起させるような格好に身を包み、木葉はあるビルの
屋上にいた。

木葉だけではない。
なのは、フェイト、はやて。
そしてもう1人。

忘れたくとも忘れられないあの少女が、今度は汚れ1つ付着してい
ない純白のドレス姿で立っていた。
前回と同じ服装。

それが少女のバリアジャケットの様だ。

「お久しぶりです」

艶のある黒髪に、深い蒼の瞳。

何もせず、ただ木葉たちを待っていたらしい。
となると、今回の目的は――

「世界を、修正しに参りました」

殺気。

前回のように見逃してくれるつもりはないようだ。

対してなのはたちには、ある不安要素があった。

神崎木葉。

彼は、両親の仇を目の前に何かおかしなことを考えていないだろうか。

「名前」

しかし。

「あんたの名前、聞かせてくれるか？」

木葉はいたって冷静を保っていた。

「殺される相手の名前くらいは知りたい、ですか？」

「逆だな。初めて倒す相手の名前くらい知りたいんだ」

殺す、ではない。

倒すと言った。

それだけで、なのはたちには十分だった。

「無謀ですね。自分の弱さをまるで自覚していない」

そう言って、少女は微笑んだ。

それは皮肉だったのか、呆れだったのか。

どちらでもない、と木葉は感じた。
言うならば、なのはたちが浮かべる暖かい微笑みに近い気がしたのだ。

「いいでしょう。先日、今回の名前をドクターにいただいたばかりですしね」

そしてその笑みを瞬時に消し、無表情に戻る。

無機質、と言ってもいい。
そこからは何も感じられない。

「イリーン、と申しておきます。以後——後数分程度でしょうが、どうぞお見知りおきを」

だが、話の通じない相手ではない。
それが分かった木葉は、少し安堵した。

「なのは、フェイト、はやて。おまえらは後方から隙を見て支援してくれ。

まずは、俺が突っ込む」

「本当に分かったんだね？あの子の力の秘密」

「ああ」

自信たっぷりの木葉の言い方に、3人はしっかりと頷いた。
しっかりと、信頼してくれた。

だから、思い切り走る。

イリーンのもとへ、一直線。

「まずは、前のお返しからだ」

いつの間にか木葉の右手には、標準よりも若干長めの日本刀が握られていた。

西洋の貴族服に日本刀。

このいかにもなミスマッチが、持ち主の性格を的確に表現している。向けるのは刃ではなく、もちろん峰。

「せっかく相談の終了まで待っていたのに、ただの突撃、否。突進ですか」

そして左の手のひらを木葉に向ける。
あの時と、同じように。

「実に、うざいです」

だが、形成されたものは違った。

ただの歪み^{ゆが}ではない。

それは歪み^{ひず}に近い。

空間の、欠落。

「そこに空間は『存在』しません。疑似的なブラックホールのようなものとお考えください」

イリーンは笑う。

先程のような微笑みではない。

明らかに侮蔑の意が含まれる表情。

「触れれば、死にますよ？」

「——っ、木葉！」

フェイトの声。

止まって、と叫ぶ暇もなく。

「たあっ！」

刀を振りかぶりながら、
歪みの中へ、

木葉は消えた。

消えた。

と、思った。

少なくとも、3人は。

いや、ここは逆に表現するべきだろう。

残る『2人』は、木葉が死ぬはずが無いことを理解していた。

1人は木葉本人。

そしてもう1人は、イリーン。

人を、物を消すことのできる空間を作り出した——歪ませたはずの人物だ。

「くっ——」

しかし。

イリーンは、木葉にためらいがないと気付いた刹那、自分を守るように両手を交差させる。

「——せやっ！」

丁度そこへ示し合わされたかのように、日本刀——ストライトネスが直撃。

魔力で障壁が生成されるが、小さな体ではその衝撃は受け切れず、真後ろへ吹き飛んだ。

そのまま体はビルの一部に突進し、イリーンは瓦礫の山に埋もれてしまった。

それだけで済んだのは、しっかりとガードを作れたから。

では、なぜガードを作った？

木葉は歪みに触れたのに。
死んだずなのに。

答えは明瞭、明快、明白。

空間を歪ませる力。

そんなものは存在しないからだ。

先程の空間も、ただの――

「ただの、幻術だ」

空間歪曲魔法。

文字にするのは簡単だが、現実を表すとなると話が違う。

空間座標の掌握

空間位相の認識

この2つをこなした上で、空間に別の何かをねじ込む。

それが主な使用法だが、こんな芸当を人間が行うのはいささか力不足だ。

何もかもが、足りていない。
それこそが、欠如している。

「そんなめちゃくちな奴が、魔力が少ない訳がないだろ」

木葉が『それ』にはつきりと気付いたのは、なのはの射撃を受けた

とき。

「あの時。本気で殺しに来てたはずのおまえの一撃を受けて、気絶どころかすぐに立てる程度の痛みだった」

瓦礫の中にいるはずのイリーンに話し掛ける。

ガードはしていたのだから、意識はあるだろう。

「そこで1つの仮説が推測された」

なのはたちは、まだ何が起きたか理解できていなかった。

「もしかしたら、魔力が少ないのを隠すための工作をしてるんじゃないか？つてな」

だから、木葉の言葉に耳を傾ける。

一言も聞き漏らさないように。

「射撃があんたに届かなかったのは、不可視で広範囲のシールドを展開していたから。空間歪曲は幻術の類い。だと、したら」

瓦礫が、揺れた。

そのまま中から噴き出すように破片が飛び散り、中心にはイリーン。

「空間歪曲つてのは、安易に自分に近づかせないための『はったり』つてことだ」

綺麗だったドレスは無残にも切り裂かれ、見る影もない。

「本当の確信を持ったのはさっき。突っ込んできた俺に、『攻撃』

じゃなくて『待ち』を選択したときだけだな」

「……正直、びっくりです。死ぬ前に見破ったのは、あなたが初めてですよ」

客観的に考えれば、答えはすぐに出たかもしれない。
が、人間は恐怖に弱い。

空間歪曲、なんてものを目の前で見せ付けられてしまえば、普通は恐怖でまともな思考ができなくなってしまう。

思考の柔軟性。

木葉の長所であり、短所でもある性質が有利に働いた結果だ。

「すごい……木葉くん」

「……うん。その推理もだけど」

「そやな。普通、八割確信があっても突っ込める勇気がない」

度胸が座っている。

なのはたちは感心の表情だが、それは少し違う。

木葉は、自分の身の利害など考えていない。

生きていたら成功。

死んだら、それまで。

根本的なところで割り切っている。

「まあつまり、補助に長けた魔術師。虚偽の道化師とでも名付けて

やる」

「案外かっこいいのがショックです」

「ってことは、だ。それが見破られた以上、あんたに勝ち目はない」

「……………」

「おとなしく、負けといってくれねえか？」

そして――

弱いこと

「負けを認める、ですか」

下を向く彼女の表情は見えない。

だが、その声からは怒りの感情がひしひしと伝わる。

「甘い、甘すぎですよ」

「……は？」

気が付いたときにはもう、木葉の両腕は体の後ろで縛り上げられていた。

「木葉くん！」

「動かないでください。手元が滑ってしまいますよ？」

木葉の喉元には小型のナイフ。
それでも殺傷能力は十分すぎる。

「イリーン、どうやって……」

「どうやって？」

魔力付加を利用した瞬歩。

「ただ、動いただけですが」

それは魔導師としては一般的な技術であり、実際なのはたちには見えていたし、対処もできたはずだ。
だが如何せん、彼女たちからは距離があった。

そして木葉は弱い。

能力などは関係なく。

実戦に、弱い。

「くっ——」

だからこれは、ただの木葉の実力、実戦不足。
相手の切り札さえ見破れば、と思っていた木葉の安直な考えが招いた結果だ。

甘い。

木葉が実戦を戦いぬくには、思考がまだ甘すぎた。

「木葉……」

木葉とイリイン。

なのはとフェイトとはやて。

2つの距離は20メートル程。

「それでは、ゲームでも始めましょうか」

そう言ってドレスの中から取り出したのは、木葉の喉元に当てられているものと同じ。
鋭く尖った。

鉄の、重み。

「的当てです。ただし一方的な、ですが」

右手のナイフは木葉の喉元。

左手のナイフは的に狙いを定める。

「動かないで、くださいね」

少しだけ右手を動かす。

たったそれだけの動作で、木葉の喉元から1筋の血が流れた。

それを視界に捕えたなのはたちは、迷うことなく各々のデバイスを下ろす。

「おい……何やってんだよ？仕掛けが露呈したこいつくらい、おまえらなら簡単に倒せるだろ！？俺なんかに構わ——」

叫ぶ。

たったそれだけの行為も、ナイフをさらに深く食い込ませるだけだ。

対してなのはは——

「できるわけ、ないよ」

と、絶体絶命の危機を向かえた状況にも関わらず、笑いかける。

「もう、木葉は私たちの仲間なんだよ？」

「まだあんまり役に立てへんけどな、——それでもや」

フエイトも、はやても。

いつもと変わることはない、暖かい笑顔。

そんな表情を前にしては、木葉は何も言うことができなかった。

ただ、自分の甘さと弱さを恨んだ。

「それでは、あなたから」

言い終わる前に、

「——っ」

小型のナイフはなのはの右肩に突き刺さった。

その箇所を中心にして、どんどん血がバリアジャケットを滲ませる。

倒れそうになりふらつき、寸前で持ち直す——と同時。

今度は左のふくらはぎに鈍痛。

「あ……くっ」

早くも立つことができなくなり、膝をついてイリーンを睨み付ける。

それを見たイリーンはすでに興味をフエイトに移していた。

瞬時に右足首と右腕が痛みを襲われ、力なく地面に向かう。

はやても同様に両足の痛みを耐えていた。

ここまでの間、わずか1分。

「……………ふざけんな」

どうして、こんなにも簡単に人を傷つけられる？
どうして、なのはたちは苦しんでいる？

「俺の、せいだ」

考えろ。

考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ考えろ
考えろ——！！

この状況を打破するには、どうすれば——

「……………ストラス」

そうだ。

ふと。

思いついた。

付け入る隙。

奴の——イリーンの行動は『ある一点』において矛盾している。

なぜだ？

答えは決まっている。

奴は俺を――

「いけるな？」

主人の声でストライトネスは木葉の頭の前まで飛翔し、

「なっ何を――」

「貫け」

そのまま、

《yes , my load（お望みのとおりに）》

大量の血が舞った。

「ぐっ――」

鮮血が一面に飛び散る中、ストライトネスに貫かれた者が鈍いうめき声をあげた。

木葉――ではない。

頭を貫かれれば即死。

それでもまだ声をだせる者など、いるはずが無い。

貫かれたのは、腕だ。

木葉を守るように覆った、イリーン（……）の右腕。

「——やつ！」

それを確認した木葉は、イリーンの血を浴びながら彼女の腕からストライトネスを無理やり引っ込抜き、そのまま腹部に蹴りをたたき込む。

今度はろくにガードもできず後ろに吹き飛ばされて倒れたのを一瞥。なのはたちの元へ走った。

「木葉、くん……平気、だった？」

「——っ、バカかおまえは！」

無傷の木葉。

致命傷では無いにしろ、出血の激しいなのは。

そんな状況でも他人を気遣えるなのはに、木葉は何とも言えない動揺を感じた。

「俺の、せいだろ……俺がこんな甘ったれた考えじゃなければ、俺がもっと強ければ！……せっかく信じて、任せてくれたのに」

責めてほしかった。

ただ自分を責めてくれれば、何も考えなくていい。
楽になれる。

こんな時にまで逃げ道を欲しがる自分に、木葉は嫌気がさした。
最低だ、と思った。

だが。

「違うよ」

この3人がそんなことをできる人間ではない、ということを木葉は知っている。

「これは、私たちが弱かったから。木葉の責任じゃないよ」

「そんなこと——」

「私たちは、木葉のことを信じたんだよ？」

「……ああ。信じてくれた。なのに俺は——」

すぐに動けるような傷ではない。

しかし、それでもフェイトは立ち上がり、木葉に寄り添った。

「今もまだ、信じてるんだよ？」

「——！」

まだ。

それは、次に繋がる希望。

「なのほも、はやても、私もまだ信じてる」

「もちろんや、けど。私たちは支援できそうにない」

両足に怪我を負った彼女はなおさらだ。

だから、とはやてが続ける。

「頼んだで、木葉くん」

こんな自分でも。

足手まといにしなければならないような自分でも、まだ必要としてくれる。

信頼、期待。

ならば、それに精一杯応えたいと思った。
これまでにないくらい強く、思った。

「……任せて、くれるか？」

「もちろんだよ」

木葉にもたれかかりながら、フェイトは再び地面に膝をついた。
思った通り、立っているのも辛いようだ。

「ちょっとだけ待っててくれ」

だから、木葉は1人。

「すぐに終わらせてくる」

腕の痛みに耐えるイリーンに向き直る。

「うん、待ってる」

言ったと同時に、3人はアースラの転送システムで回収された。すぐに治療を受けることになるだろう。

「ストラス、気付いてるな？」

《I got it.（もちろんです）》

しっかりと、ストライトネスを右手で握る。

突破口は見つけた。

後は、そこに向かう手段を見つけるだけだ。

「あいつは言葉とは裏腹に、俺のことを殺せない理由がある」

殺す、と散々言われた。

しかし、それについて不可解な点がいくつかあった。

初めて会った時も見逃した。

何者かへの報告を理由にして。

そして今回。

殺せる状況はいくつもあったのに、何故か時間稼ぎのように振る舞っていた。

なのはたちを倒し、木葉だけを連れられるように。

2つの事象から察するに、木葉には生かしておく何かしらの『存在価値』がある。

それはクロノも言っていたことだ。

だからこそ、先程は迷いなくストライトネスを自分に向けた。イリーンが木葉を庇うことを推測して。

そこで、推測は確定に変わった。

「だったら、それは利用するしかないよな」

《mission start（任務開始）》

最初から死なないと分かっていたれば、できることは幾らでもある。

「神崎木葉、ストライトネス——」

期待には、応えてみせよう。

「行くぞ!!」

希望の色

木葉とイリーン。

2人きりの戦闘が始まってから、すでに10分。

「私があなたを殺せないと分かったから何でしょうか？こうやって体力を削り取り、気絶させてしまえばお終いですよ」

木葉は常に防戦に回っていた。

イリーンが放つ射撃を、ただひたすら受け続ける。

「ぐっ——」

もう十数発は体に命中しているだろうか。

1つの重さが軽いにしても、流石に辛くなってきた。

《are you ready? (まだですか?)》

「……後少しだ」

それでも、避けようとはしない。

その場から動かず、かろうじて反応できる攻撃に障壁を展開するだけ。

そんな木葉を、イリーンは不愉快に思った。

「どうして避けない——いや、そこから動かないのです？馬鹿にされている気分ですよ」

そして、イリーンが作り出した光は数十。
今までで最大の数だ。

「あなたは私の魔力量が少ないと言いましたね。それは間違いです」
「……」

「私は生まれつき魔力を練りこむのが苦手でしたね、一つ一つの威力は並に劣りますが……」

「……」

「魔力量だけなら誰にも負けません。質より量、というやつです」

木葉は終始黙って聞いていた。

——否。
聞いてすらない。

奥底深く、眠っているかのように思考を進めていた。

「そろそろ、終わらせましょう」

数十の射撃が木葉に向かう。
同時にではなく、時間差を着けて四方八方から。

「……よし」

いくつもの射撃を見据え、ようやく木葉が動いた。
深呼吸、そして足踏みを二回。

ストライトネスを右肩に添えて構えをとる。

「だいたい、『把握した』」

そして一歩。

前に踏み出したと同時に、1つ目のシューターを切り落とす。

生じた爆煙に乗じてもう一歩。

「——右」

避ける。

今まで受け続けてきた状況と一変。

すべての射撃を避けながらまた一歩。

「——上。右斜め後ろ。正面」

踏み出す速度は一步ずつ上昇していく。

直前よりも速く。もう一步分速く。

気が付けば、走りだしていた。

「なっ!?!」

イリーンは硬直する。

全て避けられたから、ではない。

全ての攻撃が、事前に読まれていたからだ。

「ストラス!!」

《yes・my load》

そこに、隙ができた。

ただ振り下ろす、お世辞にも芸のある攻撃ではない。

しかし、手を伸ばせば届く距離にまで接近しているこの状況下では、最も有効な一手だった。

「やつ！！」

風を斬る感触。

ただ強く、精一杯の力で。

それは見事に、イリーンの負傷した肩へ衝突した。

「うぐあ——」

低いうめき声をあげ、イリーンは動きを止める。
完全に意識が傷口へ向かっている。

すかさず木葉は拘束——バインドを施した。

「……なんとか、成功だな」

理解に時間がかかってしまった、と嘆息。

瞬時思考【アーリーシンク】

なのはたちが名付けた木葉の能力。

相手の攻撃パターンを読み取り、そこに自らの憶測を織り交ぜ、次の動きを予測する思考能力。

簡易に説明してしまえば、頭の回転の早さだ。

木葉は、それがずば抜けている。

今回あえて受け手に回ったのも、正確で確実な一撃を叩き込むための布石。

パターンを読み切ることにのみ意識を集中していたからだ。

しかし。

「はっ——」

イリーンは嘲るように笑っていた。

「あなたごときのバインドなら、すぐに抜け出せます」

そう。

木葉にはまだ決定打がない。

イリーンを降伏させられるだけの、一撃が。

「あなたに私は倒せない」

「俺には、な」

木葉は空を見上げていた。

それに習って、イリーンは顔を上げてみる。

「――！」

そこには、光があった。

桃色。

金色。

白色。

よく見慣れた、彼女たちの色だ。

「流石にあいつらの砲撃を受けりゃ、あんたもただじゃ済まないだろ」

「あ……」

「あいつらが撃つのと、あんたがバインドから抜け出すの。どっちが早いか賭けてみるか？」

脱力。

なのはたちが戻ってくるのは、明らかな計算外。

すでに、戦いを続ける気力は無くなってしまった。

絶望の表情がそれを物語っている。

「私の、負け……」

そして。

再びのアースラ艦内。

いつももある部屋の1つ、医務室の扉が開かれた。

「あ……木葉くん」

「おう、待たせたか？」

何気ない挨拶と共に入室した木葉だが、いくつかの傷から戦闘の形跡が確認できる。

静かな医務室。

3つあるベッドは、全て少女たちによって埋まっていた。

「うん。ちょっと待ったかも」

意地の悪そうな笑みでフェイト。

軽い冗談を言えるあたり、そう酷い怪我ではないようだ。

「そりゃ悪かった。具合はどうだ？」

それでも、一応礼儀として尋ねておく。

何と言われても、自分のせいだという罪悪感は消えない。

「少し痛むけど、もう歩けるよ」

「そっか」

だが、謝りはしない。

心やさしい少女たちの気遣いを卑下してしまうほど、木葉も無神経

ではない。

「まあ、あれやな」

その意を感じたのか、はやてが明るい声でささやいた。

「初場所、初勝利おめでとう」

「初場所って、相撲のノリでいいのかよ」

病室とは思えないほど、とても穏やかな空間だ。
さっきまで戦ってたんだよな、と木葉は自分の中で再確認。

うん。

戦ってたな。
痛いし。

「勝利……って言うていいのかな？ちよっと、ズルしちゃった」

「ズル？」

少女、イリーンはあの後アースラの局員によって捕らえられた。
抵抗の様子もなく、拍子抜けするくらいすんなりと。

「ああ。おまえらの力を借りちゃったからな」

「……？私たち、何もしてないよ？」

「——いや、こっちの話だ。気にするな」

なのはと同様、フエイトとはやても首を傾げる。
しかし、問い詰めたところで木葉は何も話さないだろうことは分か
っていた。

彼ほど分かりやすい性格の持ち主はいないだろう。

「ねえ、木葉」

「ん？」

「ありがとね」

「……ああ」

何の『ありがとう』だろう、と木葉は思った。

イリーンに勝ったことか。

無事に戻ってきたことか。

信頼に応えたことか。

どれでもいいや、と思考を停止。

何にせよ、礼を言われるのは悪い気分ではない。

「それで、あの女の子は？」

体を起こしながらなのはが尋ねる。

もう歩ける、というのは本当らしい。

「今はクロノが尋問中だ」

「……尋問」

「つつても、軽いお茶会のノリだよ」

お茶会、という言葉に3人がピクツと反応を見せる。

尋問と聞いたときよりも怯えている気がするのはいのせいかな。

なのはが『リンディ茶……』と言ったのが耳に入ったが、とりあえず流しておいた。

触らぬ神にたたりなし、である。

「気になるなら見に行くか。もう歩けるんだろ？」

「え……でも、いいのかな？」

確かに、気になるところではあった。

散々殺すなどと言われ、異様な名前まで付けてきた少女に興味がないはずがない。

「言つたら、お茶会のノリだって」

もつとも、イリーンは終始不服そうな表情をしていたが。

「……うん。お話、してみたいな」

「決定だな。ちょっと待ってろ、はやて。車椅子取ってくる」

はやての怪我は両足。

流石に歩くのは辛いだろう。

はやての謝礼を背中を受け、木葉は席をたった。

「車椅子、か。久しぶりやな」

「そうだね」

くすつ、と笑いながらフェイト。

言っでは悪いが、はやてには車椅子が似合う。

長年乗り続けていたからだろうか。

皮肉なものだ。

「それにしても、だよ」

「……なのは？」

語り掛けるようにではなく、1人つぶやくように喋りだすのはに、フェイトは嫌な予感しかしない。

「明らかに実力差があるあの子に勝ったってことは、やっぱり木葉くんは策士向き……となると、今後の練習メニューは――」

「あはは……完璧にスイッチ入ってもうたな」

はやては教導官モードに入ってしまった友人を見て苦笑い。

「木葉、御愁傷様……」

そしてフェイトは、新しい仲間の行く末を案じるのだった。

話の条件

「話さない？」

「ああ。少しも口を開かないんだ」

リンディとクロノは疲弊の表情。

人形に話し掛けるようなことを続けていたようで、当然といえば当然だろう。

「戦っている最中は、饒舌だったんだがな」

打つ手なし、といった感じでクロノは肩を落とす。

対してイリーンは無表情のまま、正座の体勢から動こうともしない。

「イリーンちゃん、お話聞かせてもらえないかな？」

なのはが話し掛けるも、結果は同じ。

まるで機械のようにまばたきを繰り返すだけだ。

しかし。

「……幾らだ？」

ピクリ、と。

ほんの僅かだが木葉の言葉に体が反応した。

「やっぱりか」

「こ、木葉、どういうこと?」

焦りながらフェイト。

木葉はいつも通りの面倒くさそうな表情で応じる。

「こいつの態度を見りゃだいたい分かる。『話さない』んじゃなくて、『話せない』んだ。つまり、依頼者が存在する。

そいつとの関係が忠誠心なのか金銭契約なのかは分からなかったが……まあ、その反応は後者だろうよ」

なら話は早い、とイリーンの眼前へ。

「500円」

「……」

「800円」

「……」

「1000円」

「何からお話しましょうか?」

「案外安いな、おまえ」

基準は紙幣みたいだ、とクロノに通達。
即席の分析力と簡素だが効果的な交渉術を展開する木葉に、その場の全員が舌を巻いた。

瞬時思考。

木葉の能力を再認識。

「まずはイリーン、あんたのことだ」

「自己紹介でよろしいですか？」

「よろしいぞ」

「本名は明かせませんが、性別は女。年齢は11歳。『ある方』の依頼を受け、あなた方を殺しにきました」

Aさんだけは別ですが、と付け加えて。

「【管理局の管理者】ってのは？」

「存在しません。『ある方』にそう名乗れと言われました」

「その『ある方』ってのは誰だ？」

「言えません」

「なんで俺だけは特別なんだ？」

「言えません」

「なのはたちを殺す理由は？」

「……」

「聞かされてない、か」

そこで一旦質問を切り上げ、リンディとクロノに耳打ちをする。
イリーンはなのはたちに任せておいた。

「何か分かったのかしら？」

リンディとクロノは共に、木葉の思考能力を信頼するようになっていた。

だから先程の会話で、木葉が何かを掴んだのだろうと思ったのだ。

「ああ。うまく【交渉】できれば、イリーンをこっちに引き込めるぞ」

「引き込めるって、裏切らせるといふことか？」

「その通りだ」

確信を持った態度。

木葉はすでに決まったことのように話す。

「話を聞く限り、イリーンと『ある方』ってのに金銭関係以外の繋がりは無い。金で雇われた臨時傭兵って感じだな。

なら、ただ単にそれ以上の金をこっちが出してやりやいい」

「こっちがって……管理局が、か？」

「当たり前だろ」

「君が思っているほど、管理局の金は使い勝手がよくない……そんな簡単には無―「無理、とは言わせない」

クロノの制止をさらに制止。

「エース級魔導師3名の負傷、及び一般人2名の殺害。そんなやつから依頼主の因果関係も引き出せないまま、何も分かりませんでした。と上に報告するのか？」

「……………」

そこで、理解してしまった。

木葉の言う【交渉】が、イリーンとの間にないことを。

「金さえ用意できれば、イリーンから何でも聞き出せる。それは俺が保証してやる」

これは、木葉と管理局側の交渉。

引いては、クロノとリンディとの交渉だ。

「……上と掛け合ってみましょう」

「艦長！」

しかし。

そこに選択の余地はない。

「どう考えてみても、木葉さんの提案に分があるわ」

「いい判断だ、リンディさん」

木葉にとって、管理局の評価など正直どうでもいい。
なぜ自分たちを狙うのかにも興味がない。

ただ。

知らない気が済まないことが1つだけあった。

神崎葉巻。 神崎落葉。

両親の死の理由だけは、知っておかなくてはならない。

なつたのだつた。

なんとも、お金の力は恐ろしい。

それにしても、と木葉は思う。

もともと容姿がいいだけに、そうやって懷かれると単純に可愛らしい女の子だ。

補助魔法が優れているだけあつてイリーンの腕の怪我はすでに完治に近いが、それでも罪悪感が残る。

可愛らしい女の子を刺した。

ひどいトラウマになりそうな一言だ。

「えっと……イリーン」

とりあえず、謝ろう。

うん。

それが一番だ。

「何でしょう、木葉さん？」

味方になるにあたり、イリーンはみんなを名前で呼ぶようになった。ちなみに提案者はなのは。

お金のためなら何でもします！というイリーンの返答には言いたいことが山ほどあったが、気にしない。

「その、腕のことなんだけどさ」

「ああ、これですか」

もう何ともありません、とぶんぶん振ってみせる。

「それでも、一応謝るところと思ってな」

「謝る、ですか？」

一瞬の思案の顔。

刹那、ぱっと明るい笑顔になった。

「慰謝料ですね!？」

「……………」

やっぱり却下。

謝るのなし。

つくづく、お金は恐ろしいと思った。

と、まあそんなことがあり、なんにせよ強力な仲間ができたのだった。

ただし、イリーンから情報が得られるのは短くても3日後。
リンディが管理局上層部に掛け合った結果、それが金の届く最短期

間らしい。

正式にお金を受け取るまでは話せません、というのがイリーンの主張。

なんともしつかりしたお子様だ。

ちなみに、その金額は天文学的。

全世界の管理局というだけあって、その膨大なスケールは計り知れない。

という訳で。

最低3日間の休暇が与えられた。

家でゆっくりしたらしよう、と意気込んでいた木葉だったが――

「木葉くん、そっちの注文お願い！」

「あのさ、休憩って知ってるか!？」

喫茶翠屋。

なのはの両親が経営するこの店に、何故か従業員服を着た木葉がいた。

「――ったく。さっさと注文しろよ」

ゴッソ、と。

ぶっくらぼつに尋ねる木葉の頭を、なのはがひっぱたいて店の奥に

連れていく。

「つてえよ！急に殴るやつがあるか！？」

「だって全然接客になってないんだもん！」

「その前になんで俺が接客やってんだよ！？」

それはリンディの提案だった。

思考能力は目に見張るものがあるにせよ、性格にやや難がある木葉。せつかくの三日間を利用しない手はない、ということで作戦の決行が決定。

【木葉更正大作戦（仮）】

1日ごとに1人ずつが木葉を更正させていく、下手をしたら訓練よりも厳しいプログラム。

初日はなのは担当ということで、木葉は翠屋で接客のアルバイトに勤しむのだった。

「とにかくっ、基本は笑顔だからねっ！」

「……面倒くさ——」

「だから、ね？」

「……はい」

こんなことで木葉の性格が正常になるとは思えないが、【木葉更正大作戦（仮）】とは記されているとおり仮の姿。

実際には、心に負った傷を表に出さない木葉の慰安計画である。なのははその真の計画を忘れていいのか知っていてか、どちらにせよ更正に尽力を尽くすのだった。

つかの間の休息。

ようやく訪れた安穩。

短い様で長い木葉たちの休暇は、まだまだ終わりそうにない。

一人と一人

孤独を求めていた時期があった。
孤独を得ていた時期があった。
ひたすら孤独に身を委ね続けて。
今度は、繋がりが恋しくなった。

「い、いらっしやいませー」

笑顔。 笑顔。

接客スマイル！

木葉の頭を支配するのは、そんな言葉だけ。

「ご注文などー、お頼みになったらいかがでございますかー？」

口調はつたない、というよりはや日本語ではない。

よってなのは鬼の監視を逃れるには、とにかく笑顔しかないのだ。

「木葉くん、お昼の時間だよー」

そんな更正プログラムを耐えぬくこと約6時間。

朝9時から始めていた作業に、昼休みという名の休息が訪れた。

昼にしてはずいぶん遅い時間だが、正午付近は喫茶店にとってかき入れ時なのだから仕方がない。

「とりあえずお疲れさまー。どうだった？」

「なのは、おまえはいつもこんな事やってんのか？」

脱力感。

それが言葉と態度の節々から感じられた。

「うーん。まあお手伝いするときはだいたいね」

「……尊敬するよ」

「にはは、ありがとう」

素直に褒められて顔を赤らめるなのは。

サンドイッチとお茶。

そんな簡素な昼飯も2人で食べると美味しいな、と思った。

「それから、悪かったな」

「……なにが？」

「氣い、つかわせちゃってよ」

「なんだ。氣付いてたんだ」

【木葉更正大作戦（仮）】

簡単に言えば、木葉に元気になってもらおうという計画。

その効果かどうか。

木葉は普段めつたに見せない笑みを浮かべていた。

「こういうのは、素直に嬉しいもんだな」

「そう？私は『面倒くさい』んだろうなあって思ってたけど」

わずかに舌を出して、意地悪そうなのは。

そんな態度に、木葉はさらに笑う。

「確かに、面倒くさいな」

「えー、なにそれ」

不服そうに口を尖らせるなのは、でもな、と木葉。

「ちょっと分かったことがある」

「うん？」

「面倒くさいイコール、嫌な事ってわけじゃないんだな、って」

きつと。

自分の人生は面白いものではなかったのだろう。

自分自身を客観的に見て、始めてそう思った。

面倒くさい事とは、決してつまらない事ではない。

こうやってコキ使われるだけでも、その中に楽しさが、嬉しさが隠れていた。

不思議と、嫌な感じはまったくしない。

「そう言ってもらえると、嬉しいな」

なのはがいてくれるからだろうか、と思った。

それはなのはが特別という訳ではなくて。

一緒に喜んで、一緒に楽しんでくれる誰か。

それだけで笑えるのなら、面倒くさい事も案外悪くない、と。

「木葉くんってさ」

不意に、名前を呼ばれた。
いつになく真剣な表情で。

「フェイトちゃんのこと、好きだったりする？」

「……何でそう思う？」

「あの時から、雰囲気で。なんとなくだけだね」

あの時。

それは少し前の話。

2人で共に泣いた、あのことを指しているのだろう。

「どうだろうな」

「私、結構真剣だよ？」

「……いや、別に茶化して言ってるんじゃないさ」

分からなかった。

確かに、フェイトのことは気に掛けている。

しかし、それが――

「好き、に繋がるのか分からない」

自分に似た境遇に親近感を持ったのか。

同情を抱いたのか。

純粹に、好意なのか。

つまり、そういうこと。

自分の中で整理がついていない。

「だけど」

これだけは言える。

「あいつみたいな奴は、嫌いじゃない」

嫌いじゃない。

その逆は、好きなのか。

どちらでもないのか。

「そんなの、ゆっくり決めればいいだろ?」

「……そうだね」

納得、といった感じで立ち上がる。

彼らには時間がまだたっぷりと残されている。

明日も、明後日も繋がっていく。

人はそれを、希望と呼んだ。

「まだまだお客さんは来るからね。がんばろっ」

「はいはい」

それでも。

面倒くさいことに変わりはないな。

と、いつもと同じように木葉はため息をついた。

いつもと違ったのは、1つの想い。

明日を楽しみだと思えた、大事な想い。

休暇2日目。

翠屋での疲労を足腰に溜めながら、木葉は八神家に到着した。

「料理を教えたる！」

というのが、昨日電話での開口一番。

何でも、（自称）料理の鉄人であり、（自称）天才シェフも真つ青だそうだ。

たぶん。

それは両親を失った木葉に対する隠れた気遣いなのだろう。

だが、それがまったく隠れていないことにはやては気付いていない。暖かさが、滲み出てしまっている。

「んー、足腰が痛い」

昨日より疲れなければ何でもいい、と思った。

翠屋の忙しさは異常だ。

その上、いつの間にか突如現れたイリーンに奢られるという始末。

とことん面倒くさい。

「ってことで、さつさと始めようぜ」

「何で気付いたら座ってんねん!？」

許可を得てから上がらんかい、とはやて。

いきなり現れた木葉に余程驚かされたのか、胸に手を当てて呼吸を整える。

「こっちは疲労満タンで来てんだよ。もつといたわれ」

「人の家で態度でかすぎや……」

ラフな格好にエプロン。

普段とは違った自然な服装は、一段とはやてを魅力的に見せている。下準備はすでに出来上がっているらしく、文句を言いながらも木葉を立たせて台所へ連れ出した。

「へえ、結構本格的な感じで」

「当たり前や。万年１人暮らしを舐めたらあかんでー」

「……だな。悪い」

「謝ることやないで。それに、木葉くんも１人暮らしのお仲間入りや」

「ああ。——ははっ、そうだった」

決して、笑いながらするような話ではないのだろう。

だが。

はやてとならそれができる。

どんなことでも明るい笑顔で、吹き飛ばしてくれる。

そんな所も、彼女の魅力の１つなのかもしれない。

「せやけど、今はちゃんと家族がいるんよ？」

「ん。ヴォルケンリッター、だったか？」

はやてに手を添えてもらいつつ切るのは人参。

「そや。今は長期任務でみんな出てるんやけどな」

「管理局も、人使いが荒いよな」

茶色の固形物があるところから、メニューはカレーで間違いないだろう。

いくらでも作り置きができる、1人暮らしには嬉しいメニュー。

「まあ、私らは罪滅ぼしも兼ねてるところがあるからな」

「……万引きとかしちゃった？」

「あっはっはー、どついたらか？」

目がマジだ。

笑ってるけど目がマジだ！

危機を感じた木葉は黙々とじゃがいもに向かう。

その手つきを訂正するように、再びはやての手が木葉に伸びた。

「聞きたいんやろ？」

「おまえが言いたいんだろ」

「んー、まあそやね。木葉くんには聞いといてほしいかな」

闇の書事件。

管理局のデータベースにはそう記されている、はやてと4人の騎士、そして現在の親友との出会いのお話。

ほとんどはやてが話していて、木葉は相づちを打つ程度。それでも話の節々には興味津々に食い付いてくる。

「なのはとフェイト、そんな頃からぶっ飛んでたんだな……」

「そやねー。イリーンちゃんほどでもないけどな」

「あいつを引き合いに出したら誰でも一般人だろ」

殺戮金好き少女イリーン。

ものすごい濃ゆいアニメが作れそうだ。

「まあ色々あつたけど、今は幸せですって話や」

はやてには悪いが、木葉は少し安心した。

誰でも辛くて、痛い過去を持っていて。

それを乗り越えて幸せな人間が周りに存在していることに。

なのは然り。

フェイト然り。

はやて然り。

クロノ然り。

イリーンも、そうなのだろうか。

今度じっくり聞いてみよう、と思った。

後は鍋で煮詰めるだけ。

2人のカレーは、もうすぐ出来上がる。

すでに日は暮れ、涼しく心地よい風が舞うところ。

2人は食卓に座り、過去話を一旦打ち切る。

「それでは、木葉くんの料理人デビューを祝ってー」

「ほとんど手伝ってもらったけどな。乾杯」

キンッと鳴らされたグラスの中身は牛乳。

少しばかり雰囲気欠けるが未成年では何も言えまい。

「いやいや、初めてにしてはよーやったと思うで？」

「なら、よかった」

周りが優しい人間ばかりなのは、何故だろう。
自分は逃げてきただけの弱虫なのに。

——たぶん、補い合っているのだろう。
埋め合わせるように。
凸と凹。+と-。

弱いから、強い意志たちが集まる。

そんなことを考えながら、まずは一口。

「……うまい。」

何だこれ、すっげえうまい！作り方は普通だったのにうまい！？」

とりあえず、うまいを3連呼。

語彙の乏しさは勉強量に比例している。

「そら、私の愛が存分に含まれてるからな」

「……冗談？」

「うん。冗談」

「ちくしょう散れこの野郎」

「野郎やないもん」

そこまで絶賛されては、はやても照れてしまう。
軽い冗談は、その照れ隠し。

「木葉くん、期待してもた？」

「……うるせーよ」

「もー、浮気したらあかんよ？」

「浮気って、誰にだよ？」

「フエイトちゃんに決まってるやろ」

またその話が、と木葉は嘆息。

そんなに分かりやすいのだろうか。

「昨日なのはにも言われたんだけど……」

と、そこからは昨日と同じ話。

この調子でいくとクロノやリンディ、イリーンにも知られている可能性もある。

そうなると非常にまずい。

「あのな——」

そして。

木葉が話を終えたとき、はやてから返ってきた言葉はなのはそのれとは違っていた。

「あほか」

「なっ——何だよいきなり」

心底呆れた、といった表情。

それは木葉にか、木葉の言葉で納得してしまったのはにか。

「つまりあれやろ。自分の気持ちを知るのが怖い、と。少女マンガの乙女かあほ」

「またっ——2回も言いやがったな!？」

「何回でも言うたるわ。木葉くんのおほ。……フェイトちゃんの気持ちもちやんと考えたらな」

「あん?フェイトのって……」

「フェイトちゃん、ものすごい奥手なんよ?」

「いや、知ってるよ」

フェイトの奥手な性格は、現代では希少価値なほどで。

あまり馴れない相手には自分の意見を提案することも躊躇う。

木葉には、少しずつ心を開いてきてくれたのだが。

「そんなんで、いつまで気持ち分かんへんって言い続けるんや? 木葉くんから歩み寄らな、逃げてるだけやと何も変わらんよ?」

「俺から、か」

また逃げるのか。

はやては木葉とフェイトを思っただけの発言だろうが、木葉にはそう聞こえてしまう。

今までの生き方。

俺はそれを否定すべきなのだろうか、と。

「正直、怖いのかもな」

「自分の気持ちを知るのが？それとも、フェイトちゃんの答えがかな？」

「どっちも、だよ」

木葉が自分から本音を語ることがめつたにない。

だからこのことは、木葉にとってそれほど大事なこと。

「まあ、フェイトちゃんもやけど。木葉くんも超がつく鈍感やからな」

「そんな自覚はなかった」

よほど美味しかったのか。

2人のカレーは話の最中でも減り続け、ごちそうさま。と同時に手を合わせる。

「言いたいことは色々あるけど、とりあえずありがとな、はやて」

「ええよ。今日は早よ帰って明日に備えてな」

「……まあ、それについても色々考えてみる」

「うん」

玄関先。

木葉は余ったカレーを半分もらい、帰路につく。

そして、残された者。

「木葉さんと、フェイトちゃんか」

1人になったはやては一言。

「お似合いやと思うんやけどな」

そんなつぶやきは夜風に乗って。
すっかり冷えた闇空に消えた。

過去の罪

人生、山があれば谷がある。

どこかで登ればどこかで降りる。

どこかで降りればどこかで登る。

そついうふうに、なっている。

だから。

幸運と不運は、人生で総計するとプラスマイナスゼロになるらしい。

だとしたら。

そろそろ私にも、幸運が訪れてもいいのではないか。

真っ白で、雪のような花びらが絶え間なく舞い続ける世界。

第3管理世界。

アレイトリーシャ。

とても穏やかで、人も少ない世界。

その中でも極地——まったく人影のない広場に、少女が佇んでいた。

「ただいま、帰りました」

白いドレスが映える少女。

イリーンは、静かに地面に膝をついた。

「パパ、ママ」

イリーンの前には2つの墓石。

しかしそれは墓石と呼べるような立派なものではなく、単に石を積み重ねて作られたものだっただけ。

それぞれに名前が彫られているのだろうが、拙い文字で書かれたそれを読み取ることはできない。

「帰ってきて、しまいました……」

故郷に辛い思い出しか持っていないイリーンは、今さら帰って来たことを後悔した。

それは、5年前の記憶。

アレイトリーシャ。

この世界に、ある一つの村があった。

「いつも悪いねー、■■■ちゃん」

「えへへ、困ったときはいつでも言っただけ」

彼女がまだ6歳の頃。

今となっては忘れてしまった、本当の名前を持っていた頃。

魔力量が大きく補助魔法に長けていたイリーンは、その集落の小さ

なお手伝いさんとして可愛がられていた。

「■■■ちゃん、この荷物を運ぶのを手伝ってくれるかい？」

「うんっ、今いくねー」

村の人々はあらゆる場面でイリーンを必要とし、彼女自身も無償のお手伝いを楽しんで行っていた。
人の助けになること。

幼いながらに、それは彼女にとって大きな生きがいとなっていた。

「パパ、ママ。ちょっとお出かけしてくるー」

「今日もお手伝い？」

「うん！」

「そっか。気をつけてね」

「うんっ！」

そんなイリーンと両親。

3人はごく普通の、しかし幸せな家庭を築いていた。

いたの、だが。

「ねえ！最近■■■ちゃんのお手伝い料が高すぎるんじゃない？今日はこれ以上値段を上げないよう、お願いしにきたの」

ある日急に家に押し掛けてきた村の人々によって、イリーンに衝撃の事実が露呈した。

今まで無償のお手伝いとして自分がやってきたこと。

村のみんなの笑顔が報酬だと。

そう信じてきたことを、いとも簡単に覆されたのだ。

「何言ってるんだ。うちの物をそんな安い金で使ってもらっちゃ困るんだよ。払えない奴に、コレは一切使わせない！」

物。

コレ。

自分の子では、ないのか。

優しい家族。

そんなものはなかった。

すべてただの幻想で、虚偽だった。

その日から、両親の彼女に対する扱いは豹変した。

本性が露呈してしまった今、『自分の物』である彼女に気遣う必要が見出せなかったのだろう。

自分を物として扱われ始めたイリーンの心境は、とても表現できるものではない。

自分の部屋に閉じこもる日が極端に増えた。

悪い夢なんだ、と何度も自分に言い聞かせた。

そんなことがあって以降。

見せかけだけで繋がっていた家族は、ひどくあっさりと崩壊に向か

った。

細い糸がぷつり、と切れるように。

心を閉ざしたイリーン。

使えなくなった所有物に苛立つ両親。

そんな関係がいつまでも続くはずはない。

いきなり入ってこなくなった金への欲望が、両親の間にも亀裂を入れた。

前触れもなく始まったのは、夫婦喧嘩などではない。
もはや、殺し合いだった。

私のせいだ、とイリーンは思った。
思ったから、父と母を止めに入った。

……はずだったのに。

残されたのは、2人の血に打たれたイリーンただ1人。

どうして、魔法を使ってしまったのだろうか。

どうして、力加減を間違えてしまったのだろうか。

どうして、……

「親殺しの私に、墓を参る資格なんてないのでしょうが」

辛い過去を想起しながら、イリーンは一輪の花を添える。

綺麗な、蒼色の花弁。

母から受け継いだ、瞳の色。

「パパとママに、お伝えに来ました」

両親を失ってから今までのこと。

それから、これからのことを。

「不思議な方たちに出会いました。お金よりも大切なことを、教えてくれるそうです」

イリーンを初めて墜としてくれた人たち。

繋がりが大切なのだと教えてくれた人たち。

「私は、それに興味があります」

ずっと昔に忘れてしまった、大切な気持ちに。

言いながら、笑った。

それは家族に向ける、優しい笑顔。

「パパとママが見つけれなかった何か。それを探しに行ってください。」

木葉さんたちと、一緒に」

立ち上がる。

その目に、迷いはない。

「それを見つけれたらなら、また会いに来ますね。今度はたくさん
の花束を持って」

それでは、と言い残し歩を進める。

無理を言って外出させてもらったのだから、早く戻らなければ。

その時。

一陣の風が白い花を一斉に揺らした。

イリーンの耳は、それを確かに捕えた。
がんばって、と囁かれた微かな声を。

——ただの幻聴だったのかもしれない。

しかし、そんなことはどうでもいい。

はい。

と風に返事をする。

彼女の瞳からは暖かい光がこぼれた。

2人の距離

一歩だけでいい。

その一歩を踏み出せる勇気が欲しくて。

そうすれば、手の中に収まる気がしたから。

海鳴市から少し離れた市街地。

そこには少しばかり名の知れた待ち合わせのスポットがあり、その前に立つのは金髪の少女。

そして、少女の横で両手を合わせる木葉の姿があった。

「本っ当に悪い！」

木葉を待つこと1時間。

寝坊というなんの個性もない遅刻の仕方をしてみせた木葉に、彼女は怒るでもなく微笑を返した。

「木葉、ちよつと変わった？」

「……へ？」

予想もしていなかったフェイトの反応に、木葉は呆然と顔を上げる。

「初めて会った頃の木葉なら、『遅れた、起きるの面倒くさかった』とか言ってたよ。きっと」

「……そんな嫌味な奴だったか、俺？」

そつだよ、と今度は苦笑。

「でも、変わってないところもあるね」

「……例えば？」

「遅刻してくるのは、予想してた」

とりあえず今までの生き方を反省した。
もう寝坊はしない、と心に堅く誓って。

「お詫びに昼飯は奢らせてもらうよ」

「うん。ありがとう」

そして。

そういうフェイトも変わった、と木葉は思った。

出会った頃はここまで心を開いてくれなかった。
今だって、遠慮せずに『うん』とは言ってくれなかっただろう。

休暇3日目。

この日フェイトは木葉をお茶に誘った。

ゆっくりと休日を過ごしたい木葉には素晴らしい提案であり、喜ん

でいたのだが。

——単純に、寝付けなかった。

なのはやはやてに核心をついた話をされた結果、柄にもなく緊張してしまったのだ。

そんな状態が一晩で消えるはずもなく、どこかぎこちない動きでフエイトと並ぶ。

「で、これからどうするんだ？」

「ここからちょっと行った所にね、静かな雰囲気のレストランがあるんだ」

カジュアルな黄色のワンピースに調和した金髪をなびかせながら、木葉の手を引く。

「——っ」

別にやましいことを考えていた訳ではない。

が、妙に意識してしまっている女性に手を握られた木葉は、その熱を帯びた手を振りほどいてしまった。

「あ……」

フエイトは木葉の赤くなった顔を見て、自分のとった行動の意味を理解。

「い、ごめんっ」

それが今さら恥ずかしいことだと思い直したのか、フェイトも顔を真っ赤にして下を向く。

「い、いや……その」

——フェイトちゃん、ものすごい奥手なんよ？

なぜかこの時、急にはやての言葉を思い出した。

——木葉くんから歩み寄らな、逃げてるだけやと何も変わらへんよ？

他人になかなか行動を起こせないフェイト。

そんな彼女がここまで心を開いてくれているのに。

また俺は、逃げようとしてるのか？

そう思った時にはすでに、体が動いていた。

「あ……」

所在なさげに行き場のなくしたフェイトの手を取り、何事も無かったかのように再び歩きだす。

「こ、木葉、あの……手」

「嫌か？」

「え……う、ううん。そんなことない」

「じゃあいいだろ。こっちだよな？」

暖かい、とフェイトは感じた。

ぎこちなくて、ぶっきらぼうなのに、優しい手。

そんな木葉の手に引かれて、フェイトは心地よさそうに目を細めた。

「うんっ」

ぎゅっと。

強く、もっと強く握り返す。

その分だけ、暖かさが増す気がして。

自然と、2人の口が緩んだ。

「あそこの喫茶店で一番高いのって何だったっけな？」

「……俺の財布には限度があるからな」

「ケチ木葉」

「うるさい」

こんな何でもない会話でも心が弾む。

フェイトだからかな、と木葉は思った。

木葉だからかな、とフェイトは思った。

お互いに。

お互いの存在が大きくなりつつある今を感じていた。

静かに音楽が流れる穏やかな喫茶店。
その席の1つに、2人は向き合って座る。

「ねえ、木葉」

軽い昼食としてスコーンを取りながら、フェイトは向かいに呼び掛けた。

「私たちの間では、お互いに遠慮はしないって言ったよね？」

「ああ、言ったな。確かに」

2人の約束。

あの時、あの場所で誓ったこと。

「じゃあ聞くけどね。最近、無理してない？」

「無理、って……何のだよ？」

「あの子、イリーンのことだよ」

フェイトが話をしたかったのは、つまりそういうこと。

復讐に興味が無いとは言っても、目の前に両親の仇がいるのだから、普通なら気が気でないはずだ、と。

お互いに遠慮しないと制約したからこそ、前触れもなく核心を尋ねられる。

そんな関係も、木葉がフェイトを気に掛ける要因の1つでもあった。

「憎くないのかってことか？」

「……うん。あんまり、こういう言い方はよくないんだけど」

言い淀んだのは、イリーンのこれからに関わるから。

何だかんだといって、フェイトがすでにイリーンを仲間だと認めている証拠だ。

「あの子は木葉の両親を殺したんだよ？」

果たしてフェイトはそれを自覚しているだろうか。

「それなのに木葉は無頓着っていうか……何を考えてるのか、全然分からない」

それが怖いんだ、とフェイトは言った。

抑えつけていたイリーンに対する憤りが、いつか溢れだしてしまうのではないかと。

そんなフェイトに、木葉は困ったように語る。

「何て言うかな……あいつは、仇じゃねえよ」

「仇じゃ、ない？」

「金で動かされてただけだろ？」

「でも……それでも、だよ」

割り切っている。

それは木葉が有す特殊な思考回路であるがゆえに、普通に考えると筋道を通らないことがある。

殺したのはイリーンだ。

というのが、一般的な帰結だろう。それが非合理的であつたとしても。

「まあ、確かにそうなんだけど——例えば、だ。子供にお使いを任せる親がいたとして、子供にお駄賃を渡すだろ？で、その子は言われたとおりに買い物をしてくる」

「……うん」

「子供はお駄賃っていう利益はあるけど、『買い物』として損得をするのは親だけだよな？」

「ってことは、そこでの目的達成はすべて親の側に果たされるって事」

つまり仇はイリーンではなく、依頼主であると。

「仇なんて小難しいことは、そいつに会ってから考えるよ」

当たり前、といった感じで堂々と語る木葉。

フェイトはそれを見て、重く考えすぎていた自分が馬鹿らしくなった。

ああ、いつもの木葉だ。

独自の思考で物語を作っていく、いつも通りの木葉だ、と。

頬が緩む。

どうして木葉の言葉には説得力があって、安心感があるのだろう。

言っていることは、かなり滅茶苦茶なのに。

「そういう根本的な所は、やっぱり変わってないね」

「満足したか？」

「うん。充分だよ」

屁理屈で臍曲りで。

そんな木葉も、好きなんだ。

好き——と。

フェイトはここで自分の気持ちを認識した。

「あのね、木葉」

「うん？」

私は、木葉が好きなんだ。

一緒にいると落ち着くのも。

安心できるのも。

もっとたくさんお話がしたいと思うのも。

好き、だから。

「ずっと、仲良しでいようね？」

だけど。

今は、このままでいい。

このままの関係で、このままの距離感で。

徐々に歩いていけば、いつかきつと――

そして木葉も。

思うことはフェイトと同じ。

フェイトが好きだ、と。

だから。

「もちろん」

躊躇うことなく。
力強く、うなずいた。

その夜。

クロノから連絡が入った。

管理局本局からの届け物。

紙幣の重み。

スーツケース数百個。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9960x/>

奇跡の法則

2011年11月4日17時18分発行